
魔法先生ネギま！～世界を思う少女（仮）～

月読

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！〜世界を思う少女（仮）〜

【Nコード】

N0315V

【作者名】

月読

【あらすじ】

ネギの妹アリサ・スプリングフィールド。彼女は兄とともに、麻帆良に行くことになった。さて、彼女の運命はいかに。

ホームルーム「卒業式」（前書き）

なんか、前の作品が行き詰まってしまったのでこっちを書こうと思いました。

ホームルーム「卒業式」

side アリサ

はじめましてアリサです。今、メルディアナ魔法学校の卒業式が終わったところです。あつ、ネカネ姉様が来ました。

「アリサ、ネギ、卒業おめでとう。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございますネカネお姉ちゃん。」

あつ、忘れてました。隣にはネギ兄様がありました。ネギ兄様は首席で卒業しました。私は2番目でした。まあ、教科書とかの内容は一回目を通せば覚えられました。禁書は中々おもしろかったです。でも、さすがに目立ちたくありませんでしたから。えっ？2番目でも十分目立つ！？それは失敗しましたね。

「あんたの修行地はどこだった？ 私はロンドンで占い師よ」
いつの間にやら、アーニヤがきていました。

「あつ、待ってください。今、確認します。……！」

「どうしたの？」

「日本……学校の……先生？」

「えっ、アリサも同じなの！」

「「ええ〜！！」」

私が呟いた後にネギ兄様が反応してネカネ姉様とアーニヤがびっくりしていました。

side ネギ

びっくりした。まさかアリサも同じだなんて。でもいいかな。タカミチもいるけど近くに知っている人がいるってのは。

「校長、なにかの間違いではないのですか？」

「そうよ、アリサは落ち着いてるからまだしも、ネギはボケでチビで……」

side アリサ

なんか、ひどい言われようですねネギ兄様。まあ、ここで一言いってきますか。

「決まったことは決まったことですし、仕方ないのでは？」

「そうじゃな、2人とも頑張りたまえ。」

「「はい。」」

まあ、向こうに行ったら行ったでいろいろありそうですね。私は私の好きなように動きますが。

ホームルーム「卒業式」（後書き）

勢いって怖いですね。やってしまったら止まらない。本当に怖いです。

休み時間「初期設定のプロフィール」(前書き)

主人公のプロフィールです。

休み時間「初期設定のプロフィール」

アリサ・スプリングフィールド

年齢 10 身長 129?

体重 秘密

髪 金のストレート（腰くらいまで。）

目の色 エメラルドグリーン

好きなもの、人、こと

母親 ネカネ姉様 アーニヤ 料理（特にお菓子作り） 裁縫 甘い食べ物 ティータイム 生徒 花

嫌いなもの、人、こと

兄 考えが甘い人 食べ物を粗末にする人 朝 孤独 女性に失礼な人

特技

剣術 裁縫 料理 精霊との会話 解呪・治療魔法 魔法付加

補助説明

ネギの妹。母親似で昔は父親の話は出てくるのに母親は出てこなかったから疑問に思っていた。ネギとは学園に入って1、2年は話をしていたが話を返してくれないのでだんだん嫌になっていった。6年前までは魔法が使えなかったがなぜか精霊たちと話せた。事件の

時に何かあったらしくその時に指輪と剣を貰った後魔法を使えるようになった。

休み時間「初期設定のプロフィール」（後書き）

アリサ

「私のプロフィールでしたがいかがでしたでしょうか？なにぶん自分のプロフィールというのは難しく思います。

さて次回ですが、いよいよ麻帆良学園に行きます。早速兄様が何か起こしそうな予感がいたします。……はあ、まあ私は私の好きなように動きますが。でも、女性に失礼なことを言ったら蹴り飛ばしましょう。」

1時間目「麻帆良へ」(前書き)

やっとのことで投稿です。

1 時間目「麻帆良へ」

side アリサ

アリサは今駅のホームにいる。

「ふう。」

（やっと学園の敷地に入りました。日本の方々は優しいです。それにしても兄様は何で勝手に動き回るのでしょうか？）

アリサは回りを見た。すると走っていく人を見た。走っていく人の中には、『遅刻』という言葉が紛れている。

「私も初日から遅刻はまずいですね。この人たちについて行けばいいです。さすがに兄様もそれくらいわかるでしょう。」

そういうと、アリサは走り出した。それはそれは風のように速く。

side ネギ

学園に向かっていている途中にアリサとはぐれてしまった。そして回りには『遅刻』と言う言葉が聞こえる。

「たぶん、この人たちについて行けばいいのかな？」

そういうとネギは走り出した。

「今日は運命の出会いありって占いに書いてあるえ。」
「本当!!」

（んっ？あの人たち楽しそうな話をしているな。）

走っていると女の子2人が占いの話をしながら走っていた。

「あなた失恋の相が出ていますよ?」

ネギはその女の子たちの隣まで行くとそう言った。

side アリサ

アリサは走っていた。その途中兄の姿を見つけた。

（女性に近づいたと思ったたらいきなりあれですか。本当に失礼な人です。）

そしてその女の子に何か言われている時にタカミチさんが出て来た。

「アリサ先生もこっちに来たらどうですか?」

見ていることに気付いたタカミチさんに呼ばれた。

「えっ!?あの子も?」

「ああ、君達のクラスの副担任になるよ。」

「アリサもいたんだ。」

明日菜たちが話している時、ネギがタカミチに言われたので気付いたようだ。

（何いまさら言っているのでしょうか？数分前からあなたを追いかけていましたが。ここが戦場だったら死んでますね。）

そう思いながらアリサは近づいた。すると、

「アリサ・スプリングフィールドです。これからよろしくお願いします。それと、お久しぶりですタカミチさん。いろいろと積もる話もありますね。」

アリサは挨拶をするとタカミチに嫌味げに言った。

「えっ！？兄妹なの？」

「全然似とらんな。」

「二卵性だからね。でも、まだ根に持っているのかい？勘弁してくれないかな？」

「当たり前です。まあ、それは置いときまして……」

そういうと、アリサはネギの前に行き指輪のついていない左手を広げた（指輪は右手の中指）。

パアアアン！

「「えっ！」」

ネギ、タカミチ、は驚きの声を上げた。明日菜と木乃香は固まっている。

「兄様、女性に会っていきなり『失恋の相がでている』とか失礼過ぎます!」

「えっ!でも…」「でも何ですか?せめて『今、占いのお話をしていたようですが……』とか前置きを入れなさい!」

アリサはネギに説教を始めた。

side タカミチ

(いきなりネギ君を叩いたと思ったら…)

「ああ、なるほど。」

「何がなるほどなんです(どす)か?」

納得したタカミチに明日菜と木乃香が聞いた。

「彼女はね、女性に失礼なことを言う人が嫌いなんだよ。それにネギ君のこと嫌っているようだし。」

「なるほど、納得。」

「でも、何で実の兄を嫌っているのかえ?」

タカミチの言葉に明日菜は十分に納得したようだ。木乃香は何故嫌っているか、気になったようだ。

「それは僕にはわからないよ。」

そういうと、タカミチは2人に近づいて言った。

「そろそろ行かないと遅れるよ?」

side アリサ

「いいですか? 女性に接する時は……」

「はい。」

アリサはネギに注意していた。

「そろそろ行かないと遅れるよ?」

「ちょうど終わりましたから。」

アリサはタカミチの方を向かずと言った。

「僕も嫌われてるな。」

タカミチはポツリと呟いた。

「アリサ先生、言いたいこと言ってくれてありがとね。」

明日菜がアリサにお礼を言った。

「いえ、同じ女として当然のことをしたまです。それに、あなたには何故かわかりませんが親近感がわきます。」

「親近感?」

「何といえはいいのでしょうか? 私と同じ力を感じます。まあ、当たり前ですか。ねえタカミチさん?」

「!!」

「力？」

アリサの言葉にタカミチが驚いた。タカミチはその力の意味を知っている。明日菜はピンと来ていないようだ。

「いえ、忘れてください。」

そういうと、アリサは歩き出した。

side タカミチ

（何故だ。何故、アリサちゃんが明日菜君のことを知っている？どうやって？）

学園長室で話をしている間、ずっとタカミチはそのことを考えていた。学園長にも伝えた。

「彼女がそれを知っているとは。それに、どうやってそのことを知ったかが不明とは。もしかしたら、彼女は世界の脅威になるかも知れんのう。」

学園長は髭をいじりながら言った。

「では、彼女を？」

「そうじゃな、悪い芽は早いうちに摘まねばな。」

「ですが、まだ彼女の目的が……」

「では、しばらくは様子見ということで頼むぞ。」

「はい。」

そういうとタカミチは学園長室をあとにした。

side アリサ

今、学園長室を出て教室に向かっている。ネギは2 - Aの担任、アリサは副担任になった。担当教科は英語、アリサはネギの補佐役だ。住むところはネギが、木乃香と明日菜のところで、アリサはまだ決まっていないらしい。

（それにしても、入って早々悪役決定ですか。さすがはネギ君好き集団ですね。）

アリサは今の学園長室の会話を聞いていたかのように思考していた。

「ありがとね。精霊さん。」

アリサは誰もいないところに向かって小声でお礼を言った。そこには、かなり小さな光が燈っていた。

side —

【補足説明】

——この世のあらゆるものには精霊が宿っている。火、水、木、土、風だけでなく建物、家具、小さな機械の部品などにも。中には、自由に動き回るものや魔法世界から旧世界、旧世界から魔法世界に移

動する精霊もいる。

アリサはそんな精霊たちと会話ができる。精霊たちの間では自分たちと会話ができる人間がいるということでアリサは有名なのである。だから、アリサがものを頼むと気前良く聞いてくるのだ。

side ネギ

今、教室の前にいる。中はワイワイ賑わっている。

「うわあ。これが僕の生徒!？」

「あなたではありません。私たち……いや麻帆良学園の生徒です。」

「そ、そうだね。(アリサ、ちょっと怖い。)じゃあ行こう。」

「ちょっと待ってください。」

何かと思ったらアリサが少し開いてるドアを少し開けると黒板消しが落ちてきた。

(これは有名な黒板消しトラップ!!日本にもあったんだ!)

そう思っていると、アリサはスタスタと入って行っていつの間にか出したハサミでロープを切ってバケツを片付けている。

(こんなにトラップが!?!アリサ全部見つけたんだ。すごいな。)

ネギは感心していた。

「何をやっているのですか?早く入って来て挨拶をしないと。」

「あつ、うん。」

ネギは教室に入って行った。

side アリサ

（あの人は何をほうけているのでしょうか。）

アリサがトラップを解いて入口を見ると感心の目をしている兄の姿があった。指導教員のしずな先生は若干呆れ気味に笑っている（おそらくトラップに）。

（あれくらいのトラップを気付かないで何が『立派な魔法使い』『マギステル・マギ』でしょうか？初歩中の初歩ですよ？戦場だったら確実に死んでますね。これだから勉強はしても実戦のないアマチュアは。）

いつまでもボケツとさせているわけには行かないので、アリサは声をかける。

「何をやっているのですか？早く入って来て挨拶をしないと。」

「あつ、うん。」

そついうと、ネギは中に入って来て挨拶をする。

「今日からまほ…英語を教えることになった、ネギ・スプリングフィールドです。よろしくお願いします。」

続いてアリサが挨拶をする。

「（この人、最初から危ないですね。）今日から英語の補佐役を勤めさせていただく、アリサ・スプリングフィールドです。よろしく願います。」「ということでこの子たちが今日から担任と副担任です。一応教員免許は持っているけど、見ての通り子どももお手柔らかにね。」

しずな先生が後に補足説明をした。すると、一瞬静かになった。

「……キヤー。」「……」

「いいの、この子たち貰っちゃって。」

「上げたんじゃないからだめよ。」

「どこから来たの？」

「ウェールズの山奥から。」

side 明日菜

（まさかトラップを解除までして通るとはね。）

明日菜は、少し驚いていた。10歳なんだから1個くらい引っ掛かると思っていたのだ。

（まあ、あのネギっていうガキが先だったら確実に全部引っ掛かっていたらうけど。）

そんなことを思っていると、クラスの一人のエヴァンジェリンさんが教室から出て言った。

（またサボるんだろうな。）

そんなことを考えていると、アリサちゃん（何となく息が合うのでアリサは認めている。何て呼んでもいいと言われたのでアリサちゃん）が少し外の空気を吸いたいと言って教室の外に出ていった。

（なんか気になるな。）

私はアリサちゃんの後を追いかけて教室を出た。

side エヴァ

奴の子と聞いたからさっきまで教室にいたのだが、騒がしくなつて来たのでサボるために廊下を歩いている。

「（嬢ちゃんの方は中々だが坊やはダメダメだな。）……で、なんの用だアリサ・スプリングフィールド！」

「ばれてましたか。」

私が名前を呼ぶと、金髪にエメラルドグリーンの目をした少女が舌をだしながら柱の影から現れた。

「（こんな顔もするんだな。）気配は上手く隠せていたぞ？だがまだまだ甘いな。で、なんの用だ？」

「サボろうとしている生徒を捕まえに？」

嬢ちゃんは質問を質問で返した。

「そうか、ではな。」

そういつて私は立ち去ろうとする。すると、

「ま、待ってください。冗談ですって！」

嬢ちゃんが必死に止める。

「で、なんの用だ？」

そついうと嬢ちゃんは顔を引き締めて言う。

「今夜、お時間貰えますか？教師・生徒の立場出なく、魔法使いとして。」

「話の内容にもよるな。理由もだな。何故ご今夜なんだ？」

私は、この嬢ちゃんに興味を持った。嬢ちゃんは私の情報を知^{こと}っていてなお、魔法使いとして話こあると行ってきたのだ。

「私も後日接触する予定だったのですけれど、学園側に目を付けられたようでした。」

「奴の娘なのに目を付けられるのか？」

私は少し不思議に思った。奴の子なら同じではないのか。

「奴らが見ているのは兄の方だけなので。なにせネギ君好き集団

ですからね。」

「ぶ。ネギ君…大好き…集団……ハハハッ！確かに、こちらでも坊やの噂はよく聞こえたがお前の方は聞こえなかったからな。」

「やっぱりそうですか。たかが杖を渡されたくらいで……あんなものへし折ってやります。」

「ん、杖？（渡された？）」

「6年前に父様から 渡されたらしいですよ。」

「何…だと？その話詳しく聞きたい。今夜、時間を開けとくからその話を聞かせる？」

「わかりました。では、今夜あなたの寮に伺います。」

side アリサ

エウゝ アさんがいなくなった後の廊下に今、私はいる。

（やった、エウゝ アさんに今夜会う約束成功。これで、村のみんなを…）

「で、明日菜さん。いつまでそこに隠れているのですか？」

私は廊下の角に話かけた。

side 明日菜

アリサちゃんを追って来たらやっぱりエヴァンジェリンさんと話をしていた。途中、聞いてはいけないようなことを聞いてしまった。

（学園に目を付けられる？）

私は信じられない。アリサちゃんみたいな子が目を付けられるなんて。そう、考えていたら

「で、明日菜さん。いつまでそこに隠れているのですか？」

声をかけられてしまった。私はしぶしぶアリサちゃんの前に出た。

「あの…今聞いたことは一切公平しないでください！」…えっ！
「？」

私はびっくりした。他にになにかされると思っていたからだ。

「本来なら、記憶を消すのですがあなたには効きませんので。」

「やっぱり……え？私には効かない？（なんでなんで……）」
「やはりあなたは自分の力に気がついてませんね。」

アリサちゃんがボソツと呟いた。

「力って？朝もそんなふうなこと言ってたよね？」

「えっ！聞こえたんですか？でも今、私からは言えません。」

「そう、じゃあいつか教えてよね？」

「はい。では、教室に戻りましょうか？」

アリサちゃんがそういつて私は近くの教室の時計を見る。それを見て私たちがは走り出した。

「げっ、１時間目遅れるじゃん。」

「大丈夫ですよ。遅れたら私が言い訳しますから。」

「別にいいよ。そんなの。」

私はアリサちゃんの申し出を断ったが、

「だって、私のこと心配して来てくれたんでしょ？」

「……」

私はまた驚いた。アリサちゃんが敬語を使ってない。

「だったら、かばってあげなくちゃね。」

「わ、わかったわよ。」

結局、授業に遅れてしまったが、１時間目は英語でみんな騒いでいて遅れたことに誰ひとり気付いていなかった。

1時間目「麻帆良へ」（後書き）

アリサ

「今回は明日菜さんのフラグ立て（？）になってしまいました。でも、クラスの人と仲良くなれたのでうれしいです。それと、クラスの皆さんとメールアドレスを交換いたしました。まだ私、携帯電話を持ったばかりだったので使い方が今一わかりませんがこれからなれていこうと思います。」

明日菜

「アリサちゃんが敬語を使わなかったのって心を開いてくれたってことかな？ていうか、あの時の笑顔可愛かったな……って私ったら何考えているのよ！？私は高畑先生一途なのに！！……でも可愛かった。ダメダメ………でも………」

2 時間目「世界樹」(前書き)

文才が欲しいです。

2時間目「世界樹」

side アリサ

今、私は学園長室にいる。理由は今日から泊まるところを聞くためである。

「今日から泊まるところはこちらで決めておいた。今、その子たちが来てくれるからのう。ちと待っててくれんな？」

「わかりました。」

目の前にいるのは学園長。髭をいじりながら喋っている。

（最初見たとき妖怪かと思いました。だって、あんなに頭が長いんですよ？以前魔法学校の後輩に見せてもらったアニメを思いだしましたよ。ぬら○ひょん？フ○ーザの第三形態？ていうかあの髭うざいですね？魔法で剃りましょうか？）

ガチャ！

そんなことを考えていると一緒に暮らす人が来たようです。

「それでは紹介するぞ。知ってはいるだろうが、2-Aの「桜咲刹那」と龍宮真名さんですね」……その通りじゃ。では、二人ともよろしく頼むぞ。」

「はい。」

学園長の言葉に二人は返事をしている。その間に学園長室に結界をかけて置いておいた荷物を持った。

「では、二人とも案内をお願いいたします。」

「わかりました先生。」

「そんなに畏まらなくてもいいですよ刹那さん？これから一緒に暮らすのですから、名前で結構ですよ。」

私は刹那さんにそういった。

「では、アリサ先生も敬語をやめてくれないか？」

真名さんが私にそう言ってきた。

「これは、癖ですよ。では行きましょう。」

そういうと、私たちは学園長室をあとにした。

side 真名

今、私はアリサ先生と寮に向かっている。学園長から仕事でアリサ先生を見張ってほしいという依頼を受けた。

（何故、このような子どもを？）

私は不思議でならない。このような子どもの何を警戒しているのだろう。寮に着くとアリサ先生が言う。

「あなたがたは、魔法に関係している生徒ですね？それに、人であって人でない。」

「「!!」」

side 刹那

(何故そのことを?)

アリサ先生の言葉に私は驚いた。隣にいる真名も驚いている。

「何故って顔をしていますね。相手の本性を見破るのは初歩ですからね。」

アリサ先生はたんと答えた。

「でも、どうやってわかったのですか?」

私はそれが不思議でならない。するとアリサ先生は、

「気や魔力の流れ……」

「えっ?」「何っ!?!」

意外な返事が帰ってきた。

「生きとし生けるもの全てに気や魔力が流れているのは知っていますか?」

「ああ。」

アリサ先生は突然問いかけてきた。私もそれは知っている。

「その流れ方は人によって多少違いますがだいたい同じなんです。ですがあなたがたは決定的に違うところがあります。それは、あなたが一番わかりでしょう？」

「なるほど、力の流れ方か。いままで注意していなかったからな。」

この時、私はすごい人だと思った。人の力の流れを感じれるということはそうそう身につけれるものではない。

「まあ、あなたがたがなんであろうが私の生徒には変わりありませんがね。後はどう思つかは本人しだいですよ、刹那さん？」

「！！な、なんでそれを！？」

私の悩んでいることを遠回しにいったアリサ先生。

「さあ、なんででしょうね？」

アリサ先生ははぐらかした。

「刹那、そろそろいこう。みんなが待っているぞ？」

真名がそういった。

「そうでした。アリサ先生、一旦教室に行きましょう。みんなが、あることの準備をして待ってます。」

「あることってなんですか？」

「行っただけのお楽しみです。」

私ははぐらかされたののお返しができたと思いました。

side アリサ

今、教室に向かっている途中です。相部屋の二人は先に行くと言つて今は一人で行動中。

『……か』

「んっ？」

不意になにかの声が聞こえたような感じがした。

（こういう場合は精霊であることが多いですね。）

私は、声の聞こえる方に向かった。

side 明日菜

買い出しの帰り途中、教室に向かつて歩いているとアリサちゃんを見つけた。

（刹那ちゃんと真名さんが教室に来るように声をかけたはずだけど……）

アリサちゃんが向かっているのは教室ではない。私はアリサちゃんの後をつけることにした。

side アリサ

声の聞こえる方に来たらそこは世界樹の根本だった。

「私を呼んだのはあなた？」

私は根本に手を当てて目を閉じると尋ねた。

『えっ！』

驚いたような声が返ってきた。

「『誰か。』って呼んでいたでしょう？」

私は優しく尋ねる。

『初めて声が届いた。では君が精霊たちが言っていたアリサ？』

「ええ。多分そのアリサでしょう。」

『やっぱり、君なら声が届くと思った。お願いがあるんだけど……』

「ちよつと待ってください。」

私は世界樹の言葉を止めると、

「明日菜さんそこにいるのでしょうか？」

side 明日菜

アリサちゃんの後をつけて来たら世界樹の根本にきた。

（こんなところで何をするのかな。）

黙って見ているとアリサちゃんは木に話かけている。

（木と話してるの？）

そんなことを考えているとアリサちゃんに呼ばれた。

「明日菜さんそこにいるのでしょうか？」

私は物陰から出るとアリサちゃんのとこにいった。

アリサちゃんのところまで行くとアリサちゃんは私の手を左手で握って右手で世界樹の幹に手を当てた。

『この人は？』

「！」

私は驚いた。今まで何も聞こえなかったのにいきなり頭に直接響くような声が聞こえた。

「神楽坂明日菜、私の生徒です。」

『そうなんだ。』

アリサちゃんは平然と話している。

「世界樹の…声？」

「そうですね。私を通して明日菜さんに聞こえるようにしたんです。」

「

私の疑問にアリサちゃんは説明付きで答えてくれた。

「でも…なんで？」

「なんででしょう？不意にそうしたいと思いました。」

アリサちゃんもなんでかわからないらしい。

（これって、信頼されてるってことかな。）

そう思うと私はうれしく思った。

side アリサ

（何故でしょう？私は何故明日菜さんと呼んでしまったのでしょうか？）

普通なら、巻き込みではいけない守るものなのだが、私は自分に疑問を持った。

（今はそれよりも。）

「お願いってなんですか？」

世界樹の言ったお願いが 気になった。

『私の意識だけでいいから、外に出たいんだ!』

「何故外に?」

『動物みたいに動き回ってみたい。』

「なるほど。(単純ですね。)じゃあこっしましよう。外に出たら私の使い魔として行動してもらいます。あなたには知識もありますから。」

『構わない。』

世界樹の答えは即行にきた。

すると私は世界樹から手を話した。

「どうやるの?」

明日菜さんが不安そうに尋ねてきた。

「このぬいぐるみに意志を移します。大丈夫、すぐに終わりますから。」

私は今日の昼休みに生徒から貰った猫にコウモリの羽の着いた。ぬいぐるみ(ニャン〇イア)を出した。

「少し離れて下さいね。」

明日菜さんを少し離すと私は目を閉じて集中した。

「では、スピリット・ソング【精霊の歌】」

私が唱えると私の身体に不思議なオーラが漂った。

「これはなに?」

明日菜さんが聞いてきた。

「【精霊の歌】と言って魔法効果を高める魔法です。私が独自で編み出しました。それと、普段の身体能力強化程しか魔力を使っていないので気付かれることはありません。」

「そうなんだ。」

「ではいきます！《スピリット・ソウル・マイ・ピース》【精霊よ
汝の力を使い 彼の者の魂魄を此に縛り上げよ マインドチェンジ 心身交換】

私が呪文を唱えるとぬいぐるみが少し光った。その光が消えると、

「おお、本当にぬいぐるみの中に入った。どうやったの？」

ぬいぐるみが喋り出した。

「封印と解呪の魔法を応用して使いました。封印で意志をぬいぐるみに封じて解呪で身体を動かせるように、あと本体から魔力の供給もできます。」

「そうなんだ凄いね。」

本当は凄いだけではない。なんせ、今のような応用はそう簡単にはできない。これもアリサの力の一つである。

「では使い魔になってくれますね？」

「了解ニャー！」

「ニャ？」

明日菜さんがぬいぐるみの語尾に着いたものが気になったようだ。

「この姿だから語尾につけるニャー！の方が面白いニャ。…そうだ

主、名前を決めてほしいニヤ。」

確かに名前を決めないととにかくと不自由だろう。

「名前ですか。……ワルツ……でどうですか。」

「アリサちゃんその由来はなに？」

明日菜さんが名前の由来を聞いてきた。

「世界樹を世界の木」ワールドツリー略してワルツです。」

「それはちよつと……それでいいニヤー!!」……えっ！」

「主がつけてくれたからそれでいいニヤ。」

私の考えた名前でワルツは満足してくれたようです。

「……そういえば、なにか忘れているような。」

「確かになにか……」

二人は少し考え混んで。

「……ああー!!」

「どうしたニヤ？」

私たちが声を上げて驚いたワルツが何事かと聞いてきた。

「ワルツ今何時かわかりますか？」

「えっ!？6時半だけど？」

「6時半まだ間に合う……って6時半？」

二人が此に来たのは6時15分頃。あれだけ話をしたりしていたの

に15分しかたっていないなんてありえないと私は思いました。

「ああ、説明忘れてたニヤ！僕の根本に来るとニヤ、時間の流れが遅くなるのニヤ。」

「そうですね。びっくりしました。そうそう、人の前ではあまり喋らないでくださいねワルツ。話がある時は念話で。」

「了解ニヤ！」

「明日菜さん先に行つてくださりませんか。少々用事を思い出しましたので。」

私は明日菜さんが現れた頃から感じていた気配をどうにかしたいと思い、明日菜さんを先に行かせようと思いました。

「えっ！？用事つて。まさか危ないことじゃあないわよね。」

「（鋭いですね。）大丈夫、職務です。」

「わかった、みんなで待つてゐるから早く来てね。」

「ええ。」

side エヴァ

奴の娘に少し興味を持ったから茶々丸をつけさせていたが。世界樹の根本でなにかやってると連絡を受け私は世界樹の根本に向かった。

「これは、驚きだな。」

「はい、異例です。」

（世界樹の意志と離すだけでなく、他の物体に移動させるとはな。）

私は面白いものを見つけたと思った。

「で、タカミチよあれを見てどうする？」

途中ではったりあったタカミチに話しかけた。アリサは明日葉がいった後背伸びをしている。

「とりあえず学園長に報告を——！！」

タカミチが踵を返そうとした時頭上から3人に向かって「魔法の射手」が一つずつ飛んできた。エヴァと茶々丸は難無く避ける。タカミチはぎりぎりで避けた。そしてアリサのいた方を見るがそこは既に見えない。

side アリサ

「どこにいった？」

タカミチさんがキョロキョロと回りを見渡している。それを上から見て笑っている。エヴァンジェリンさんも時折視線をこちらに送りながら面白そうに見ていることからここにいることに気付いている。

「すみません。あまりにしつこくつけられていたので学園どうからの暗殺者 かと思いました。」

私がそういうとタカミチさんは何故そのことを！？と言うような顔を、エヴァは気を引き締めてタカミチさんを睨んだ。

「ひどいですよね。私が過去を知っているだけで悪役にしようとしてますし。どうせ今の世界樹のことだって頼まれたことなのに私が“世界樹から魔力を得るために意志を盗んだ”とか報告するつもりだったんでしょう？」

「……！」

私の言葉にタカミチは少し眉間がピクツと動いた。

「貴様ら狂っているな。」

エヴァンジェリンさんはタカミチさんの顔で私のいったことが本当のことだと悟ったらしい。

「まあ、6年前のあの日からこうなるのは決まっていたのでしょ

う？」

「……」

私は無言の肯定と悟り話を続ける。

「6年前に兄が父の……いやネギがナギの杖を受け取った時から――

side タカミチ

僕はアリサちゃんの言葉に何も返せない。その時……

「ですが、あなたたちは知らない。あの夜私がどうしてたかなど。あの時以前からそうでした。あなたたちがネギにしか興味が無かつ

た。そして、不思議に思わなかったのですか？あの夜を境に私が魔法を使えるようになったことを。そして知っているでしょう？それまで何故魔法を使えなかったか。知らなかったとしても憶測はつくはずです。あなたがたが私に流れている血を知っているのだから。その言葉を聞いて僕はアリサちゃんも同じようにあの夜誰かとあっていたと確信した。

「まさか、君はあの夜…。」

「ええ、大切な人に会いましたよ。そしてこの指輪と剣を貰いました。」

アリサが指にはめている指輪を見て私は確信した。彼女が誰とあっていたか。僕は膝を着いた。今まではそんなに注意して見てなかった。自分たちの対応を見て言っても信じてもらえないと思ったのか。いや実際言ったのだろう。だけど僕たちはそんな彼女の言葉が耳に入っていなかった。

「すみま…せん。」

ポロツとそんな言葉が落ちていた。

side エヴァ

（腑に落ちない、何が一番腑に落ちないかっていえば…私が空気ではないか…!）

隣にいる茶々丸は録画中とか呟きながら意外と楽しそうだ。

「そんなことを言っても時既に遅しです。」
「それはどういうことですか？」

何やら面白い展開になってきた。

「私の覚悟はもう決まっています。」
「覚悟とは？」
「知りたいですか？」
「はい。」
「私も知りたいな。」

私はその覚悟とやらが気になった。

「エヴァンジェリンさんには今夜話すつもりでしたけど？」
「今じゃダメなのか？」
「ちょっと待ってください。ワルツ今何時ですか。」

言うか言わないかは時間次第らしい。

「外では6時50分ニャ！」
「7時までに教室に行かないといけないのでやっぱり今夜で。タカミチさんも聞きたいなら今夜エヴァさんの寮で。」
「わかりました。」

文句を言う前になんか気持ち悪いと私は思った。そこでアリサが

「敬語やめてくれませんか？なんか気持ち悪いです。」
「そうかい？」

（（そうだ（です）！！）（））

この時アリサとエヴァの心が初めてシンクロした。茶々丸は隣でまだ録画中とか言っている。

2 時間目「世界樹」(後書き)

エヴァ「なあ、茶々丸？」

茶々丸「何でしょうマスター」

エヴァ「今の話ってほとんど私たちの役目ないよな？」

茶々丸「私はいい動画が取れたので十分です。」

エヴァ「…そうか。」

茶々丸「マスター？」

エヴァ「何だ？」

茶々丸「マスターは教室にいきますか？」

エヴァ「気分次第だな。茶々丸よ、お前は行きたいのか？」

茶々丸「……」

エヴァ「そうか楽しんで来いよ!!」

茶々丸「…はい。」

3 時間目「歓迎会＋実力検査」（前書き）

戦闘描写が難しいと改めて思いました。

3 時間目「歓迎会＋実力検査」

side アリサ

教室の前に行くと言名さんと明日菜さんそれに兄がいました。

「すみません遅くなって。」

「やっと主役が揃ったな。やっぱりついておけばよかったかな。」

「アリサちゃん早く早く。」

私の言葉に真名さんはたんと、明日菜さんは関係無しに私を急かした。

「あのさ、アリサ？」

「何でしょう？」

兄が話しかけて来たので私は気分が落ちました。

「明日菜さんに魔法のこと知られちゃったんだけど。」

「それで？」

私は無表情になって答えた。

「記憶を消そうと思ったたら大丈夫誰にも言わないからって言われた。」

「なら、それでいいんじゃないですか？」

私はただ、無表情で答える。

「でも——早く入りましょう。皆さん待っているみたいですよ。」

そついうと、私はドアの前に行く。

side ネギ

（どうしよう。明日菜さんに魔法のことばれちゃった。そのことをアリサに話したら怒ったような口調で言われた。そりゃそーだよ、早速ばれちゃったから。）

そんなことを考えている間にアリサはドアの方に行く。それを追って隣に行ってアリサがドアを開くとそんなことを考えていられなくなった。

side アリサ

私がドアを開けると大きな声が聞こえてきた。

「「「ようこそ、ネギ先生、アリサ先生!!」」」
「「えっ!?!」」

私と兄は素っ頓狂な声をあげてフリーズした。

「アリサ先生とネギ先生の歓迎会だ。」

「主役は真ん中へ。」

真名さんが短く簡潔に説明してくれたが、私はフリーズしている間に教室の真ん中に運ばれた。

「それでは報道部、朝倉和美の質問タイム♪朝できなかったからね。」

ボイスレコーダーを持った朝倉さんが来たので私は気を持ち直した。

「まず一つ、身長と体重は？」

「体重は2800000000000000000000pg、身長は……」

ピコグラム

ボソッ……

です。」

私が答えた後回りにいるほとんどが頭にはてなマークが浮かんでいる。

「ピコって何アルカ？」

「聞いたことないでござるな。少なくとも、なにかの単位というのは間違いないでござるな。」

「身長聞こえなかったよ？」

「でも史伽私たちと同じくらいだよ？」

様々な反応が聞こえた。そこでエヴァンジェリンさんが、

「茶々丸、聞こえたか？」

「はい。12kyー「わあああ。言わないでくださいー!」」

私は気にしている身長を言われそうになったので必死に止めた。

「ああ、気にしているのですか。」

「じゃあ仕切直して次の質問。」

空気を読んでくれた朝倉さんに私は感謝した。

「好きなものと嫌いなものは？」

「好きなものは料理、裁縫、甘い食べ物、ティータイム、花で、嫌いなものは朝です。」

「ほうなかなか気が合いそうだな。」

「はい。特に朝が苦手とか特に……」

「おい茶々丸そこはティータイムが好きなところとか言うところだぞ！！」

「はい、次々。特技は料理や裁縫の他にありますか？」

「ええ、園芸とか……そうだ、刹那さん、真名さん、部屋になにか植物おいていいですか？」

「ああ、構わないが刹那はどうだ？」

「構いませんよ。」

「えっ、アリサ先生刹那さんたちのところにいるの？」

「ああ、学園長に頼まれてな。」

side 学園長

「うつむ。」

わしはあることを調べていた。

「彼女の実力を知ろうとおもったんじゃないが。」

もっている資料にはアリサ・スプリングフィールドと書いてある。

（魔法学園の成績以外これといったものがないとは。魔力もネギの半分程度じゃし。だがそれならどうやって彼女はあのことを知ったのじゃ？）

わしは髭をいぢりながら資料を置く。

「一回彼女の実力を試すかの。」

side アリサ

歓迎会の後刹那さんと真名さんと寮に向かっている。

「そういえばその肩に乗っているぬいぐるみはなんだ？ただのぬいぐるみではないようだが。」

真名さんに肩に乗っているワルツについて聞かれた。歓迎会中から気になっていたようだ。

「この子は私の使い魔のワルツです。」

「使い魔？このぬいぐるみがですか？」

私の返答に疑問を持った。

「私の使い魔は意志を持った植物なんです。ワルツ喋ってもいいですよ。」

「ずっと黙っているの疲れたニヤ」

私が言うとワルツは喋り出した。

「ニヤ？」

刹那さんが語尾に疑問を持ったときに誰かに声を掛けられた。

「学園長が用事があるらしい。至急世界樹広場に来てほしいそうです。」

声を掛けたのは、色黒の眼鏡を掛けたガンドルフィーニ先生だった。

「こんな時間に？」

今は8時30分。あのあと門限や片付けやらで、お開きになったのだ。

side 刹那

「学園長、今何といたのですか？」

心配ないと言われたが私と真名は学園長に呼ばれたアリサ先生が心配について来た。世界樹広場にはこの学校の魔法先生が集まっていた。

「だからガンドルフィーニ先生を相手に模擬戦闘をして欲しいといったのじゃ。」

なぜ？

そういう疑問が湧いた。

「構いませんよ。NOと答えても引かせて貰えなさそうですから。」

アリサ先生は私にウインクをする。先生の言つとおり、回りを見ると結果が張られている。

「では始めるかの。」

side アリサ

学園長の言葉にガンドルフィーニ先生は袖からナイフと銃を出した。それに応えて私は影から西洋剣を出す。

「どこから出したのですか？」

「今から戦う相手に自分の手の内をさらすとしても。」

ガンドルフィーニ先生の問い掛けに私はまっとうな疑問で返す。

「それもそうですね。ダアン！」

ガンドルフィーニ先生はその言葉を境に銃を撃って来た。

ギンッ！！

私は西洋剣で銃弾を反らした。

「なかなかいいお点前ですね。」

「いやガンドルフィーニ先生だっという狙いですよ。」

ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！

今度は連射が来る。

カンッ！！キンッ！！ギンッ！！カンッ！！

私はそれを弾く。それを見てガンドルフィーニ先生はナイフを持つて飛び掛かろうとする。私はただそれを待つ。

side ガンドルフィーニ

銃弾を剣で弾くことは簡単ではない。連射でも無理。だからナイフで飛び掛かろうとしたが、アリサ先生は構えようとしなない。負けを認めるのかと思うがそれにしてはあの顔はまだ戦う意志がある。彼女はある形の状況でも何とかできるのだと悟りナイフを振り上げる。その時…

ガンッ！！

ナイフの持ち手になにかがあたり手からナイフが弾けた。

そのスキを見て彼女は反対の手を掴み膝蹴りをして銃を手放せる。

side アリサ

私はガンドルフィーニ先生の手から離れた銃を腕を掴みながら背後に回り込む動作と同時に空中でキャッチしながら足掛けで押し倒し関節技をきめる。そして奪った銃の銃口を後頭部に向かって突き付ける。

「そこまでじゃー!!」

学園長の制止がかかる。私は突き付けていた銃口を放し関節技から解放する。

「ナイフを飛ばした時どんな魔法を使ったのですか？」

ガンドルフィーニ先生が聞いてきた。

「何を言っている。魔法なんて使ってないぞ。」

「「「「!!」」」」

真名さんが変わりに答えた。

「やっぱり真名さんはわかりましたか。」

「当たり前だな。銃は私の武器だぞ？」

「銃が武器でもわかってない人はいますけどね。」

「たしかにな。」

「あの…魔法を使っていないってどういうことですか？」

私達の話に気まずそうな声が入る。その声の主は刹那だった。

「答えは簡単。ナイフの柄の部分を見ればわかります。」

そういうとタカミチがナイフを拾い柄の部分を見た。

「これは……………銃弾？」

「何！？」

「しかもこれは私が使っている銃の弾ですよ！」

「どういうことじゃ？」

魔法ではないことはわかったが疑問が残っているようだ。

「ではヒントです。私は弾丸を切ることもできた。でもあえて弾いた。」

「それも弾丸どうしがぶつかるようにな。」

私のヒントに真名さんは補足をした。

「ぶつかるってことはまた弾ける……………ああなるほど。」

「理解しました。」

「どういうことじゃ？」

学園長以外の人は納得したようだ。

「ははは、やられましたよ。まさか自分の撃った弾にやられるなんて。しかも、私の動くタイミングまで計算されているなんて。私もまだまだですね。いい勉強になりましたよアリサ先生。」

「いえ、私もまだまだですよ。」

ガンドルフィーニ先生の言葉に私はそう答えた。

「いずれ魔法も含めた模擬戦闘もしましょうよ。」

「ええ、そのうち。」

他の魔法先生の軽い挑戦に私も軽く答えた。

「だから、どういうことじゃ〜?」

学園長がいまだにわからないようで吠えていた。

「あら学園長、魔法のことはわかるのにこんなこともわからないんですね。その頭は長いだけあってそういうのも知識に入っていると思ったのですけれど、やっぱり妖怪なのでしょうか?一応、人間だと思っていたのに物理の応用もできないなんて。」

「な、何!? (物理の応用じゃと!? それに数少ないわしを人間だと思っていたじゃと!?)」

それに学園長は沈んだ。特に後者のほうで。

「では私はこれで。」

そういつて私は世界樹広場から離れていった。

3 時間目「歓迎会＋実力検査」（後書き）

刹那「すごいなアリサ先生。戦っている間に弾いた弾の着弾地点まで計算しているなんて。」

アリサ「でもこの戦法、突拍子もないことをする相手だと向かないですよ?」

刹那「そうですね。」

アリサ「さて次回ですが、おそらくエヴァンジェリンさんとの交渉と言う名前の……ボソツ……です。」

刹那「何ですか? そのボソツですごく気になります。それにエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルにあうって何をするのです?」

アリサ「……………まだ、秘密です。」

4 時間目「模擬戦」(前書き)

更新遅れてすみません。

グダグダな文かもしれませんがよろしくお願いします。

4時間目「模擬戦」

side 刹那

アリサ先生の力試しが終わった後、タカミチ先生を含め4人で帰路についている。

「あの、私の師匠になつてくれませんか？」

私はさきほどの戦いを見てアリサ先生のほうが自分より上だということがわかった。それゆえの判断だった。

「めずらしく刹那が真剣だな。」

「理由を教えてくださいませんか？」

真名からちゃちゃが入ったが無視した。アリサ先生から帰ってきたのはそんな問い掛けだった。

「銃弾弾くなんて切るより難しい技術を持っていることで私より剣の扱いは上だと判断しました。それに私は護りたいものがあります。護るために強くなりたいんです。」

私は自分の考えを隠さずに言った。

「護りたいものですか…いいですよ。自分が未熟だとわかっているところで強くなれますからね。それに回りくどくないですし。」

「アリサちゃんはまっすぐな考えの人が好きだからね。」

こうして私の弟子入りが決まった。

side 真名

さきほど刹那の弟子入りが決まった。

（いいのだろうか監視対象に弟子入りなんかして。：まあ私もなん
で監視しなければいけないのかわからなくなってきたが。）

そう思っていた矢先にアリサ先生が話しかけていた。

「そういえば、いいのですか？監視対象に弟子入りなんかして。」

「！！」

「やっぱりアリサちゃんわかっていたんだ。」

タカミチ先生は予測していたようだ。

「どうやってわかったんですか？誰にも喋っていないのに？まあば
れている時点で関係ないですね。」

「というかばれている時点で任務失敗だな。」

刹那は心置きなく弟子入りができるようで満足している。私は任務
失敗で報酬がないと考えた。

「真名さんよかったら私の仲間になりませんか報酬はこれを毎月5
ダースで。」

そういうとアリサ先生は影の中から銃弾を出した。

「こ、これは二年前マホネットで一躍有名になった初級術式が組み込まれている銃弾!!」

「ええ、大気中の魔力で発動するので使用者は魔力が減らない優れたものです。」

「しかもこれは特注でしか手に入らない中級以上ではないか!？」

「真名、そんなにすごいものなのか？」

「ああ、術式を組み込むのはそんなに難しくはないんだが、大気中の魔力を取り込むのはかなり高度な技術が必要なんだ。初級はともかく中級以上となるとさらにな。」

「さすが真名さん、これの凄さがよくわかってますね。形てきには銃弾の先端に効果術式、中止から後ろにかけて大気中の魔力を取り込む術式、そして対象に着弾した時の振動を察知、発動させる術式でコーティングですね。」

「何故アリサ先生が構造までも?・・・まさか!？」

「ええ、私が作りました。かなり大変でした。大気中の魔力を取り込む術式はもちろん、有機物とはかく無機物しかも鉛弾にこれを組み込むには。」

「一人で発明したのかい？」

こんなものを作るのは一人では難しい。他人の協力も必要のはず。私はそう思ったが、その予想は裏切られる。

「ええ、ちなみに初心者向けの杖等も作成しています。これは4年前くらいからですね。」

「いつそんなことしていたんだい? 報告書にはそんなこと書いていなかったけれど。」

その通りだ、魔法学校を卒業したばかりと聞いていた。というか4年前だから魔法学校に通っている時から造っていることになる。いったいいつの間に造っていたのか。という考えが皆に浮かんた。

アリサ先生は人差し指を口に持っていくと、

「企業秘密です。」
といった。

（企業って…まあ一応企業か。）
「どうですか？私の敵にならないのなら他の依頼も受けて結構ですよ？」

そんなおいしい依頼受けない訳がない。だから私はこう答える。

「乗った。」

side エヴァ

（さきほどの戦闘を見ていたがまさか魔法を使う前に終わらせるとはな。それに何か面白そうな話もしていたしな。）

そして私は帰る途中のアリサたちに後ろから声をかける。

「なかなかおもしろい戦い方だったな。」
「！！」

その言葉に反応して桜咲刹那と龍宮真名が反射的にこちらを見る。
タカミチは微笑みながら振り返った。

「相手に自分の手の内を見せずに終わらせたというところですかエヴァンジェリンさん？」

アリサは首だけで振り返った。

「ああ、だかあれだけではつまらん。私の家に来い。私が直々に相手をしてやる。それとエヴァでかまわん。」

「わかりました、私もあれだけで終わると思っていなかったので。」

それを聞くと私は少しおもしろくなった。

「おい、いいのか？わかってるんだろう？私が力を封じられていることを。」

「それをどうにかできるから相手になつてくれるのでしょうか？だてに長生きしている訳ではないのですよね？」

「ふふふ、ハーハツハツハ。わかっていないではないか小娘！！」

「まあ、その呪いは解くつもりですけどね。」

「何？」

私は呪いを解くという言葉に反応した。

「私、解呪も得意なんですよ。でも、あまり複雑だと解析に数日かかりますが。」

「本当か！」

「ええ、構いませんよねタカミチ先生？」

アリサは声をかけると同時にタカミチの方を向いた。

「ええ、本当は3年の約束だったはずのものを14年も縛り付けていたからね。学園長もどうにか解けないかって悩んでいたからね。もしかしたら解いたことによってアリサちゃんに対しての学園長の考えも変わるかもね。」

タカミチはそう答えた。

「でもできるのか？かなり複雑だぞ？」

「『永久石化』の解析よりは簡単ですよ。」

「「「「！」「」「」

アリサの言葉にここにいるもの全てが息を飲む。

「永久石化…ですか？」

「まさかできたのかい？」

「馬鹿な！？」

「ありえない。」

上から刹那、タカミチ、エヴァ、真名である。

「そんなことより行きましょう。それについては模擬戦の後で。ここでは話しづらいです。」

「ああ、わかった。」

その言葉で私たちは動き出した。

side - - -

エヴァの家に着いた一同は茶々丸に少し説明をし、ダイラオマ魔法球の中にあるエヴァの別荘へ移動した。

side アリサ

私は今、エヴァさんの別荘で少し自分の力を教えている。

「は？」

「だから精霊が見えるんです。」

「いや、だって精霊って普通見えんだろ？」

絶対信じていないエヴァにいう。

「じゃあ証明します。とりあえず生きてるものには全て守護精霊が着いています。その精霊はずっと一緒にいるので過去を聞きます。あまりやりたくないのですがエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルはKはKite——「ワアアア、わかった！！信じるからそれを言うな！」

他の3人はどうやって秘密を知ったのかを知って、『ああ、なるほど。』と言っていた。

「タカミチ先生、学園長に言うならメガロメセンブリア元老院に伝わらないようにお願いします。いろいろと面倒ですから。それに私、奴らが嫌いです。」

「たしかに奴らに伝わると面倒ですね。わかりました。」

そついうと私はエヴァさんの方を向く。

「では、始めましょう。」

「ああ。」

私は浜辺に着くと剣を取り出した。

「むつ、その剣…認識障害をかけているな？」

「さすがにあなたほどの魔法使いにはわかりますか。『認識障害結界解除』」

私がそう答えると、剣の輝きが増した。

「あの剣は…」

タカミチ先生が剣を見て呟いた。その剣の前の持ち主を思い浮かべて。

「なかなかいい剣だな。名は何と言う？」

「『黄昏れの剣【姫】』といいます。あつ、今回は技の準備具現化させてやりますね。」

「どういうことだ？」

「見ていればわかります。ワルツ、具現化するときの魔力供給お願いします。」

「了解ニヤ。」

使い魔契約したワルツにも精霊が見えている。世界樹なので魔力はたっぷりある。

「スピリット・ソウル・マイ・ピース 我と契約せし風精 魔力を糧にその姿をここに現せ 【来たれフィレス】」

side タカミチ

アリサちゃんが呪文（？）を唱えると彼女の前に風の塊ができた。そして、それが弾ける。そして現れたのは緑色の髪を背中まで伸ばした少女が現れた。大きさはアリサちゃんの肩に乗るくらい。

「この子はフィレス。私の使い魔であり仲間であり友達の一人です。

」

「精霊が使い魔？それにまだいるのか？」

「精霊を使い魔にするにはとりあえず精霊と話せなければいけません。それと今のところあと六人います。」アリサちゃんは律儀に説明している。彼女はいつたい何をするのだろうか、その未知の恐怖心と好奇心が私の体を震えさせる。

side 刹那

アリサ先生が精霊を具現化させている。隣にいるタカミチ先生と真名は体を震えさせている。気が付けば私の体も震えている。

（この感覚、好奇心だよね。）

隣にいる二人もそうなのだろうと思い私は目を二人に戻す。

「いくよ、フィレス！！」

『はい！！！！』

「！！！！」

アリサ先生が叫んだあとに誰かの透き通ったような声の返事が聞こえたような気がした。

（今のってあのフィレスっていう精霊の声？）

side 真名

今、アリサ先生の掛け声に答えるような声が聞こえた。刹那が耳に手を当てているということは刹那にも聞こえたのだろう。

（声まで聞こえるように具現化させるとはわね。驚きばかりだ。）

そんなことを考えていると、アリサ先生が咏唱を始める。

side 茶々丸

マスターとアリサ先生の模擬戦を見てみると、私のメモリーには入っていない術式が入っていました。だいたいの術式から幻術の応用のようなものと解説しました。

「我 汝の力を借り 汝と共に戦うことを望む」

『我 汝に力を与え 共に戦うことを許可する』

「『ユリオン』【人精合体】』」

また術式が現れました今度のは解析不能。さきほど現れた精霊が光となってアリサ先生の胸に入り込む。

「マスター、楽しそうですね。」

アリサ先生の行動に驚きつつも楽しそうにしているマスターを見て私の顔も少し綻んだ。

side エヴァ

私はアリサが何をするのか黙って見ていた。

（精霊を使い魔ということには驚いたがこれもまた。）

目の先には少し髪が緑がかって回りに風を纏っているアリサがいる。

「いきなりすごい魔法だな。」

「あなたが相手相手ならこれくらい最初に出さないと。」

「だが全部じゃあないんだろう?」

「いきなり全部はどうかと。」

「まあそうだな。まず小手調べに 氷の精霊17頭、集い来たりて敵を切り裂け。【魔法の射手・連弾・氷の17矢】」

私は魔法の射手を放つ。だが当たらないことはわかっている。私はそこから飛び上がる。すると風の斬撃がもっていた場所に飛んで来た。後ろを向くと剣を構えているアリサがいる。

「!!」

「風節、桜吹雪の舞」

アリサは一瞬で私の前まで来ると技名を言った。すると幻だが桜の花びらが回りに現れる。その花びらの全てを突くように剣を突き刺して来る。

（隙がない！）

私はそれを断罪の剣で対応する。障壁を張ってもよかったが剣もユニゾンの力を持っていると突きを弾いているときに知り簡単な障壁だったから2、3秒しか持たないだろうと悟った。後ろに下がれば風の攻撃が来る。横に避けるか弾くしかない。すると突きの嵐が止んだ。

「すごいですね。風のスピードに耐えるなんて、さすが最強の魔法使い様ですね。」

「今、風でよかったと思っていますよ。これで雷や光だったら耐え切れん。残り五人の内二人がそれ何だろう？」

「ご名答、やっぱりわかります？」

「アリサも奴の子どもだからな。」

「そうですか、ふう。」

そついうとアリサはユニゾンを解いた。

「なぜ解いた？」

「魔力の量はまだ大丈夫なんです、あの状態だと風以外の魔法が使えませんので。」

「なるほど、今度は魔法勝負か。」

私はそれもおもしろいと思った。

「では、【魔法の射手・雷の23矢】」

アリサはそう唱えると全てまっすぐに飛ばして来た。私は直撃のだけを打ち消した。

（おかしい。アリサがまっすぐ飛ばすだけなんて——！！）

その時アリサの唇が吊り上がるのが見えた。私は直感でその場を離れる。するとさっき直進していったはずの魔法の矢がもといった場所に降り注いだ。

「私魔力のコントロールとか自信あるんです。【魔法の射手 光の523矢・風の523矢・雷の523矢】」

「そのようだな。【氷楯】」

合計1569の魔法の矢が直撃で向かって来る。それをかなり魔力を込めた障壁と氷楯で耐える。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪。」

私はすかさず咏唱する。そして矢の雨が止むと同時に魔法を放つ。

「【闇の吹雪】」

二人の模擬戦（というより実戦）は想像よりも壮大なものだった。エヴァさんの闇の吹雪が止んだ。アリサ先生は息をあげている。どうやら魔力切れのようだ。エヴァさんはそこへさらに魔法を打ち込む。

「氷の精霊17頭、集い来たりて敵を切り裂け。【魔法の射手・連弾・氷の17矢】」

17本の矢がアリサ先生に向かっていく。

「ハッ!!」

「何!？」

アリサ先生は剣で魔法の射手を切り伏せた。

「その剣ただの剣という訳ではないな？」

「ええ、剣であると同時に魔法発動体でもあります。今はこれに風の魔法を纏わせています。」

エヴァさんの問いに剣で切り伏せながらアリサ先生が答えている。

「すごいな。」

「とても9歳とは思えない動きだ。」

隣で真名とタカミチ先生が言っている。

side アリサ

(やっぱり最強の魔法使い相手は辛いです。)

私は魔力を纏わせた姫で魔法の矢を切りながら思っている。

「スピリット・ソウル・マイ・ピース 闇夜切り裂く一条の光、我が手に宿りて敵を喰らえ。【白き雷】」
「何!？」

障壁で魔力をかなり消費したけれどまだ行ける。それを確信している。なので魔力をけっこう消費する魔法を使う。相手も来るとは思っていない。なかったらしく直撃した。そのスキにすかさず咏唱をする。

「スピリット・ソウル・マイ・ピース 来れ雷精、風の精。雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐。【雷の暴風】」
「クッ!!」

ドオオオオン!!

「ハア、ハア、ハア」

雷の暴風でできた煙りが晴れた。私もエヴァさんも息切れしている。そこでエヴァさんが話かけてきた。

「アリサ…なかなかやるな。」

「最強…の魔法使い…にそんな…こと言って貰えるなんて…こ、光荣…です。」

「そろそろ…やめるか?」

「そう…ですね。さすがに辛い…です。」

私たちは途切れ途切れに喋り模擬戦を終わらせた。

4 時間目「模擬戦」（後書き）

アリサ「一日が長いです。」

刹那「まあまあアリサ先生もう少しですよ。」

ワルツ「出番があるだけいいのニヤ。私は出番がないニヤ。」

アリサ「ワルツその喋り方で私っておかしいですよ。」

刹那「私もそう思います。」

ワルツ「じゃあおいらでどうかニヤ？」

アリサ「それだったらいいんじゃないですか？」

刹那「私に聞かれても……」

アリサ「さて次回ですけど……」

刹那「スルーですか！？……まあそこは置いときますか。それで次回は？」

アリサ「今回は……何でしたっけ？」

ワルツ・刹那「え？」

アリサ「忘れました。では次回お楽しみに」

ワルツ・刹那「ええええー！！」

*ちゃんと考えてあります。

5 時間目「力の秘密・アリサの決意」(前書き)

今回は早めにできました。
では、どうぞ。

5 時間目「力の秘密・アリサの決意」

side - - -

模擬戦を終えた二人は少し睡眠を取りに行った。その時に他の人はビーチの近くのテーブルで休憩を取っていた。

side 刹那

エヴァさんとアリサ先生は1時間くらい休んで来ると言って城の中に入って行った。

「あの動きどう思います?」

その私たちはその間にさきほどの模擬戦のことを話すことにした。

「少なくとも魔法学校で習っただけの動きじゃあない。」

タカミチ先生はそういう結果を出した。

「私もそう思う。あの動きは実戦をしたことのある人間の動きだ。」

真名もタカミチ先生の考えに賛同した。私もそう思う。

「でも報告書にはずっと魔法学校にいたということになっているの

「ですよ？」

「ええ。だからおかしい。魔法具の件もあるからね。」

「こればかりは本人に聞かないとわからないね。」

side 真名

動きのことはさっきので終わりとなった。

「そういえば、魔力切れだったのにどうしてあの魔法打てたのだろう？」

タカミチ先生がふと思い出したように言った。

「おそらく精霊と契約した得点だと思われます。」

飲み物を運んで来た茶々丸が言った。

「なぜそう思うんですか？」

手渡された飲み物を受け取りつつ刹那が聞き返した。

「私は魔法は使えませんが、魔力を感知する機能が着いています。そこで、アリサ先生が放った魔法に使われた魔力量は普通使われる魔力量の四分の一程度でした。」

「正解です茶々丸さん。」

茶々丸が言った後にさつき休みに行った人の声が聞こえた。

side タカミチ

さつき休みに行ったはずのアリサちゃんがそこにいる。

「なんで？さつき休みに行ったはずなのに。」

刹那さんがここにいるみんなの疑問を言った。

「分身体です。本体は今エヴァさんに説明しています。」

「じゃあ聞いてもいいかい？あの動きは実戦を積んだ人の動きだ。どうやって実戦を積んだんだい？」

「やはりそう来ますか。簡単です。魔法学校にいた私は分身体ですから。」

アリサちゃんはサラッと答えを喋った。

「「「なっ！！」「」」

僕たちが驚いているのを尻目にアリサ先生は説明を始めた。

「2年くらい魔法学校で永久石化を解くための情報を集めましたが見つからず世界にある魔法的な遺跡を見に行つて見ようと思いましたが。私は気も扱えるようにしていたので魔法で分身体を作るのは簡単でした。」

「でも、分身体とわかられてしまったんじゃないのかい？」

「おじいちゃんには話をつけました。」

「?」

「メガロメセンブリア元老院から送られる刺客をどうにかしてくれ
るならやめると。」

「！！！！」

Side
アリサ（分身体）

私の言葉で驚愕の顔をしている。無理もないだろう。9歳の子供に刺客を向けるなんて考えたことなどないのだろうから。

「どうしてアリサ先生に刺客を？」

刹那さんが聞いてきたので私はそれに答えるように説明をした。

「英雄の子（扱いやすい駒）は一人いれば（一つあれば）十分。そう思う人間がメガロメセンブリア元老院（あのお馬鹿さんたち）の中には多い。だから当時魔法を使えなく扱いすらそんな私は狙われた。」

「魔法を使えなかったってことは6年前の事件の前かい？」

「ええ、その時はたまたま近くを通った村人に助けて貰いました。

その時私は格闘技を覚えようと思いました。

そこでエヴァさんと私（本体）が来た。すると分身体は消えた。

side アリサ（本体）

「なぜか世界を回ってる私が狙われました。どこかで情報が漏れたのでしょうか。」

「その刺客はどうしたんだい？」

「・・・一人だけ・・・殺しました。」

「「「「「」」」」」」

「・・・その前まではどんなに傷ついても気絶させるだけで頑張りました。ですが、卒業式は私が出ようと思って帰る途中、あの時は殺さなければ・・・殺されてた。」

身体が奮え出した。あの時のことを思い出すと人を殺した自分が怖くなる。相手を突き刺したあの感触が今でも鮮明に思いだされる。

「・・・怖い、あの感触にだけは慣れたくない。だけど!!」

いつの間にか涙と声が出てきた。しかし私は言わなければならない。けど声が詰まる。

「慣れなければいけない・・・だろ？」

「「何？」」

「それはどういう・・・」

「私だって最初は怖かったさ・・・だがなお前が望む未来では必ず殺さなければいけなくなるからな。」

刹那さんの問いを遮ってエヴァさんは私に言った。

「アリサ先生の望む未来？」

刹那さんが呟いた。

「真祖になりたいそうだ。」

「「「！！」」」

三人が驚いたが私は決意を込めて説明を始める。

「この術式を見てください。」

そついい私は魔法陣を浮かびあがらせる。

「これは？」

「永久石化解呪の術式です。」

「これがですか？」

三人は術式を眺める。真名さんは魔眼も使って見ている。

「ん？これは・・・」

真名さんはなにかに引つ掛かったように一カ所を解読している。タカミチ先生もそこに集中している。

「なるほど。真祖になりたい理由がわかったよ。この術式、主に使うのは魔力じゃない。」

「僕もわかったよ。」

「すいませんわかりません。」

タカミチ先生と真名さんは理由がわかったらしい。刹那さんは陰陽

道だからわからなくても無理はない。

「刹那さんは陰陽道だからわからなくても無理はないです。真名さんのいうとおりこの術式は魔力はほとんど使いません。」

「では、何を使うのですか？」

「生命力。・・・いわゆる寿命です。」

「！！」

「後遺症を残さずに完璧に元に戻すには、魔力じゃあ無理でした。」

「だったら他の人に頼めなかったのかい？」

私の言葉に真名さんが問い掛けて来ました。

「たとえ頼んだとしても無理でしょう。術式を完璧に理解していないと発動しても失敗します。それに、これは対個人にしか効きません。この術式を発動させる時に削る寿命はその人が石になっていた年月分です。」

「だが私は理解できたが？」

「それはそこだけわかりやすいように簡易化したからです。」

「これでもかなり難しい術式なのに？」

「このまま発動したら効力は落ちます。これで元に戻せるのはネズミとかの小動物くらいです。」

「私も本物を見せて貰ったが理解できなかった。理解さえできればアリサを真祖にする必要なんてなかったのにな。」

エヴァさんが悔しそうに言った。

「エヴァさんが悔しがる必要なんてありませんよ。これは私の問題、村人を救うためなら自分が化け物になって人に嫌われようが構いません。」

「でも、真祖になるには秘術が必要なはずですよね？」

その通りである。エヴァが真祖になったのも秘術をかけられたから。その術式がなければ真祖になることはできない。だが、

「こいつ、準備がいいのだよ。遺跡を回っていたと聞いただろう？」

「まさか・・・」

「そのまさかだ。見つけたらしい。しかも少し改良している。」

エヴァさんは憎たらしげに言った。

「「改良？」」

「１６歳までは成長できるようにしたんだよ。」

「そんなこともできるのかい？」

「あっ！！エヴァさんのにも干渉して今から成長できるようにできるかもしれませんよ？」

「本当か！？やれるならやってくれ。」

私の言葉にエヴァさんは食いつくように反応した。

「もうかかった後だから難しいかもしれませんが。ちなみに何歳までがいいですか？」

「それはだなやはり１６くらいがちょうどいいな。」

「ですよー！やっぱりそのくらいじゃないと。」

「あー」

エヴァさんと話が合って回りに人がいのを忘れかけてました。刹那さんの声で戻りました。

「そうだ、これまでの話を聞いても私の弟子になることを望みますか？」

「その心は変わりません。人間だろうが真祖だろうがアリサ先生はアリサ先生です。」

「その心しかと受け止めました。その心で木乃香さんにアタックです。ちなみに精霊に聞いたりはしてません。」

「えッ！でも・・・」

「さっきあなたが言ったでしょう。私は私だって。だったら刹那さんは刹那さんですよ。」

「わかりました。でも心の準備が・・・」

「それは自分しだいですよ。それで真名さんとタカミチ先生はどうします？」

「私はアリサ先生についていくよ。依頼だけじゃなく私個人の意志で。」

「僕もアリサちゃんに付くよ。さっきの話学園長にも話しくよ。メガロメセンブリア元老院に言ったら命がないと脅しもかけて。」

「私を忘れてもらっては困るな。私もアリサに付くぞ？」

「マスターがそういうのなら私も先生の味方です。」

「ありがとうございます。皆さん。」

こうして私には頼もしい仲間ができました。

side エヴァ

「それでは準備はいいか？」

「はい。」

私は今アリサを真祖にするための儀式をしている。この術式は自分にはかけられないらしくだから私に頼んで来たようだ。理由は『メガロメセンブリア元老院に関わっている人間には頼みたくない。』だそうだ。当たり前だな。私は魔法陣に魔力を流す。咏唱はいらないらしい。すると魔法陣が赤紫に輝きだす。

「グッ。」

アリサがうめき声をあげた。身体の構成が変わるのだから苦しいのは当たり前だ。

（私は眠っている間にかげられたからな。）

side 刹那

私と真名はアリサ先生の儀式が終わるのを待っていた。エヴァさんがいうには儀式が終わると吸血衝動が来るらしい。真祖は吸血は必要ないが身体を完璧に構成するために新鮮な血が必要なんだそうだ。私たちはアリサ先生に血をあげることにした。最初は断られた鮮度が落ちないようにとっておいた（刺客）のがあると言って。でもエヴァさんにそんな余裕はないと言われて渋々了承していた。タカミチ先生は学園長に話をつけて来ると言ってこの空間を出た。

「グッ。」

頭を抱えたアリサ先生のうめき声が聞こえる。

「えっ！」

アリサ先生を見ていたら一瞬髪の色銀色になり光が反射して虹色に輝いているように見えた。だけどすぐに金色に戻ったので気のせいだと思うことにした。

やがて赤紫の光がおさまりアリサ先生が苦しそうにしている。

「いくよ。」

「はい。」

私たちはアリサ先生の元へ急ぐ。

side アリサ

儀式が終わった。終わったと同時に喉がものすごく渴いた。

（たし・・・かに、余裕・・・なんてない・・・ですね。）

私は理性を頑張って保っていると刹那さんと真名さんが駆け寄ってきた。

「アリサ先生どうぞ。」

刹那さんが首筋をだす。私はそこに牙を立てる。

「ん／＼」

刹那さんの甘い喘ぎ声が聞こえても気にせず血を飲む。体内の三分の一より少し前の血液をもらって飲むのを理性でやめる。

「はあっはあ／＼どうしたんですか？」

顔を朱くした刹那さんが血を飲むのをやめたことに疑問を持ったらしい。

「そう・・・いえば、刹那さんはハーフ・・・でしたね。人間・・・なら普通に気絶・・・している量は・・・飲んだの・・・ですが。」

「そういうことですか。アリサ先生は私を人間として扱ってくれたんですね？うれしいです。でもまだまだ大丈夫ですよ？」「とりあえず・・・休んで・・・ください。真名さん・・・からも貰って・・・足りなかったら、また・・・貰います。」

「そうですか。」

刹那さんはなぜか少し寂しそうな顔をしていたが気にせずに真名さんの血を飲み始める。

side 刹那

アリサ先生は結局私たちの半分くらい血を飲んだ。すると影から増血の薬と言って赤い丸薬を私たちに渡すと倒れるように眠りに着いた。今は茶々丸さんの膝枕で眠っている。

「なあ刹那？」

「何、真名？」

アリサ先生の寝顔を見ていると真名が話しかけてきた。

「アリサ先生に血を飲まれ時、その／＼なんだ？き、気持ち良く

なかったか？／／／
「・・・／／／」

真名の言葉に私は顔を真っ赤にした。

（たしかに、最初は痛いのかと思ったけど気持ち良くて頭が真っ白に／／）

「アリサは血の飲み方が上手いみたいだな。私でもまた飲みたいと思われる飲み方はできん。」

エヴァさんが言った。

「どうしてそう思う？／／／」のですか？／／／

私と真名の声がかぶった。エヴァさんは顔をニヤつかせると。

「あの喘ぎ声を聞けば普通にわかるぞ？」

「・・・／／／」

私たちは揃って黙ってしまった。

その後エヴァさんにからかわれ、アリサ先生が目を覚まさないの
抱えて寮の部屋に戻り、アリサ先生とどっちが眠るかを争った。今
回は私が勝ちました。

5 時間目「力の秘密・アリサの決意」(後書き)

茶々丸「今回この場を任せました茶々丸です。先生はお疲れの様子で私の膝枕で休んでいられます。先生の寝顔はとてもかわいいです。今日授業以外でずっと先生を見ていましたが先生は凜とされて小さいながらに美しいと思われましたが、やはり子どもかわいらしい一面もありますね。今マスターは刹那さんと真名さんをからかつております。あの二人があんな顔…カシヤ保存完了です。先生の寝顔？もう撮ってありますが？」

私はアリサ先生の頭に手を乗せる。

「明日からも頑張ってくださいアリサ先生。」
「んん」

アリサ先生は気持ち良さそうに眠っている。

6 時間目「仮契約」（前書き）

めずらしく10000文字を超えました。

6 時間目「仮契約」

side 刹那

現在朝6時。いつもなら起きている時間なのだが今日はいつもと違う。

「この小さい体のどこにこんな力があるのでしょうか？」

寝ている間にこうなったのだろう。アリサ先生が私の胸にうずくまるように抱き着いている。ガッチリと抱き着かれていて動けない。

「アリサ先生起きてください。」

私はアリサ先生を起こそうとするが、

「今まですっかり眠れていなかったのだろうか、もう少し眠らせてやればいいんじゃないか？」

いつの間にか二段ベットの上から降りていた真名がいう。

「そうだな。」

今まで狙われながら旅をしていて戻って来た後も罪悪感で眠れなかったのだらうと思って、今安らかに眠ってるアリサ先生を起こすのをやめた。

「朝食の準備は任せてくれたらいい。」

「頼んだ。」

そついうと真名はキッチンに向かった。

約30分たった。真名が朝食の準備を終えて戻った来た。

「準備ができたから起こしてくれないか？」

「わかった。アリサ先生起きてください。」

私はアリサ先生の肩を揺らしながら声をかける。

「う・ん。」

アリサ先生の体がムクリと起き上がる。

「ふあ？」

アリサ先生が首を傾げている。

「アリサ先生、朝です。起きましょう？（ヤバい可愛いです！・・・あれ？なんか違うような・・・）」

若干アリサ先生の姿に疑問を感じながら起きるのを促す。

「ふあい。」

まだ寝ぼけているのか呂律の回らない返事をする。アリサ先生はベツトを降りてフラフラとテーブルに向かう。

「アリサ先生、先に顔を洗に行こうか。」

真名がフラフラしているアリサ先生にそういった。すると先生はコクツと頷くと真名に手を引かれて洗面所に向かった。真名の顔が赤かったのは気のせいかな？

side 真名

フラフラしているアリサ先生を見ていてこれは（物理的と可愛さに）危ないと思った。

「アリサ先生、先に顔を洗に行こうか。」

そういうとアリサ先生は目を擦りながら、コクツと頷いた。

（これもかなりヤバいな／＼）

その動作に時めいてしまった。良くわからない衝動が私を襲うがそれを抑えて洗面所に連れていき顔を洗ったアリサ先生にタオルを渡す。

「すっきりしました。」

どうやら眠気が去ったようでいつもの口調に戻っていた。

「あつ、そうだ。」

そういつとアリサ先生は影から何か小さなものを取り出した。

「なんだいそれは？」

「真祖の力を抑えるために作った封印具です。任意で解除可能にして、魔法発動体でもあります。」

「そうする必要なんてあるんですか？」

着替えて来た刹那が聞いて来た。

「まだこの身体に慣れてませんので、今日から少しずつ慣らして行こうかと思ひまして。」

そういいながらアリサ先生は取り出したピアスを耳につける。それは星と三日月が連なっているピアスである。両耳につけると今まで膨大だった真祖の魔力が感じられなくなった。

「すごい効果だな、アリサ先生の作った封印具は。」

「世の中にはこれより凄いものなんかたくさんありますよ。」

アリサ先生は苦笑いしながら振り向いた。

「おや？先生右目の色が・・・」

「えッ！？あれ、コンタクトが！？」

アリサ先生はもう一度鏡を見ると慌て出した。アリサ先生の右目はサファイアのような青をしている。

「アリサ先生もカラーコンタクトを？」

「ええ、私オッドアイなんですよ。昔そのせいでからかわれて・・・」

あれ？おかしいな換えも持って来たはずなのに。」

影から換えのコンタクトをだそうとしているが見つからないらしい。
そんなアリサ先生に声をかける。

「アリサ先生うちのクラスはそんなことで笑わないよ。」

「たしかに大丈夫そうですね。あのクラスなら。よし、このまま行きましょう。」

アリサ先生がそういうと私たちは食卓に向かった。

side アリサ

「そうういえば私どこで寝てたのでしょうか？」

ふと思ったことを言ってみた。

「えッ？／＼覚えてないんですか？」

刹那さんが驚いたように言った。

「私ま朝にかなり弱くてさっき真名さんからタオルを貰ったのは覚えていたのですが。」

「そうなんだ。（ということはあの仕草は無意識に／＼）」

「…温かった。」

「えっ？」

寝ている間に感じた感覚がボソツと口からこぼれた。

「い、いえ／＼なんでもありません。」

「そうかい？なら早く食べようか。」

「そうですね。」

そついうと私たちは食事に戻った。

いったん職員室に言つて新田先生やしずな先生に挨拶をしてホームルーム前に教室に行くともたもや毘が仕掛けてあつた。解くのもめんどくさいと思つたので教室の後ろから入る。

「後ろから来たでござるか。」

「アイヤー、失敗したアルヨ。」

クラスのみんなは失敗とわかると自分たちの話に戻った。

「今回はあなたたちですか？古 菲さん、楓さん。」

「昨日の動き結構なてだれだと思つたでござるからな。」

「それであんな仕掛ですか。」

教卓の方を見ると昨日より危険なものになっている。

「折り紙で作つた手裏剣ですか。その言葉使いといいあなたは忍者ですか？」

「な、何のことでござるか？」

わかりやすい否定の仕方をする忍者。

「ン、アリサ先生右目の色が昨日と違うアルヨ？」

古 菲さんがそういうとクラスのみんなが私の方をみた。

「ほんとだ！」

「なんでなんで？」

「昨日はカラコンをつけていたの。」

「なんでカラコン？」

「それはちよつと……」

「オッドアイっていいな。綺麗だし。」

「そうですか？」

「うん綺麗だよ。そういうえば明日菜もオッドアイだよ。」

「逆だけど色もおんなじだし。」

と、かなり好評だった。これなら大丈夫だと確信した。

「うわ！？痛っ！！」

声が聞こえたと思ったらネギが毘に引つ掛かっていた。とたんにクラスが笑いに包まれた。

「アリサ先生、ちよつといい？」

明日菜さんが話かけて来た。

「何でしょう？」

「ここじゃあ話づらいから昼休みに話したいんだけど？」

「……わかりました。」

明日菜さんが魔法関係について話があると悟り真剣な顔で答えた。

「明日菜、どないしたん？」

木乃香さんが横から話しかけてきたので私は話を変える。

「いえ、明日菜さんが今日の英語で何をやるか聞いてきたので要点を教えようと思ったんですよ。」

私は明日菜さんにアイコンタクトをする。

「ほんまか？勉強嫌いな明日菜が？」

「そ、そうなのよ！！さすがにエスカレーター式でも少しは頑張らないといけないと思ってね。」

美味しく合わせてくれる明日菜さん。少し挙動不審だけど合格の枠です。私はさらに一言加える。

「木乃香さんもやりますか？」

「ええの？ほな、お願いしますわアリサ先生。」

そういうと木乃香さんは教科書を取り出した。私は要点を簡潔に二人に教えて行く。そうしていくうちに回からも2、3人集まって来て要点をまとめる人が出てきた。それは、刹那さん、真名さん、茶々丸さんだった。刹那さんは木乃香さんに見えないように座っている。いつも如く賑やかな朝の教室はそこの一枠だけ静かだった。

「The fall of」

ホームルーム後はすぐに英語だったのでそのまま教室にいます。今、ネギ先生（学校内だから）が英文を読んでいる。

「今の所誰かに訳して貰おうかなあ。えーと・・・」

そういうとクラスみんなが当てられたくないようで顔を背ける。

（絶対わざと背けている人がいますね。特にさっきの五人。）
私がそう考えていると、

「じゃあ明日菜さん。」

「なんで私に当てるのよ!？」

（こらこら。）

「まあいいわ。――」

明日菜さんがスラスラと答える。

「なっ・・・あの明日菜が!？」

「スラスラと答えるだ!？」

「そういえばさっきアリサ先生と勉強をしていたような。」
「何!？あの明日菜が勉強だ!？」

クラスみんなは明日菜さんが答えたことに驚いている。木乃香さん、刹那さん、真名さんは笑いをこらえている。

「アリサ先生の教え方めっちゃわかりやすかったわ。」

木乃香さんがそう言った。
すると視線がかなり集まってきた。

「先生後で私たちにも教えてください。」

「いいですよ。後でこの時期に教える範囲の要点だけまとめたプリントを作つときますね。」

「よろしくねアリサちゃん。」

「明日菜でもあなれるんだから私だつて。」

「私も頑張るアルヨ。」

「拙者も。」

こうして、2・Aの勉強意識が高まるのであった。

side 明日菜

昼休み。私は約束をしたアリサちゃんを職員室前で待っている。

「すみません遅くなつて。」

「ううん、こっちこそ。朝、いきなり言つたから予定狂つたでしょう?。」

「いえ、予定はなかったので大丈夫ですよ。」

アリサちゃんはそう答える。

side アリサ

さつき予定はなかったと言ったが、1時間目が終わってすぐ、学園長に呼ばれたのであった。内容は『変な誤解をしてすまなかった。君の覚悟は聞かせて貰った、思うように行動してくれかまわん。後ちよつとでもいいからネギ君の力になってやってくれんか?』という内容だった。兄の力になるかどうかはその時の気分でということにした。

職員室に戻ったら生徒たちとの約束通り要点をまとめたプリントを作っていた。

「とりあえず人掃いの結界をかけますね?」

「あつ、うん。」

屋上に来た私たちは人に聞かれたらまずいと思い結界をかけようと思っただけでなかった。

「あれ?おかしいですね。」

「どうしたの?」

「結界を張ろうと思ったんですが上手く作動しないんです。」

私は何かに阻害されているのではと思い回りを見るが何もない。不意に明日菜さんの顔が視界に入る。

「あつ!!そうでした。マジックキャンセラー魔法無効化能力!!」

「何それ?」

「明日菜さんが持っている能力です。その名のとおり魔法を無効化マジックキャンセルにする能力です。」

「それって魔法が効かないってことだね。」

「それだけではありません。自分の魔法効力も無効化します。」

「何それ!?!ということは私魔法使えないの?」

「ちよつと待ってください。『ひな陽奈の封印50%解放』」

私そう唱えるともう一度人掃いの魔法を唱えた。

「えっ！それってさっき失敗したんじゃない——」

「今度は大丈夫です。」

私は明日菜さんの言葉を遮り。笑顔に向けた。すると明日菜さんは顔を真っ赤にして止まった。結界が完成した感覚がした。

「成功です。」

「ほんとだ、さっきまで賑やかだったのに。」

「で、話しとはなんでしょう？」

「えっ？あつ、そうだった。」

そういうと明日菜さんは意志を込めた目をして話してきた。

「昨日の朝に親近感がわくとか言っていたでしょう？」

「まあ、はい。（といっても私には一昨日のような感覚ですが。）」

「その時、肉親を見るような目で私を見ていたよね？」

「そうですね？」

「うん。それに向きは違うけど目の色がおんなじだし、同じ力ってことはアリサちゃんもその魔法無効果能力が使えるってことだよな？それって何か関係あるの？」

明日菜さんは痛いところをついて来る。私は気を引き締めると、

「知りたいですか？」

「もちろん！！」

明日菜さんは身を乗り出して迫って言った。

「知ったら今までの暮らしに戻れなくなるかもしれないとしてもですか？」

「それってどういう――」

「言葉のままです。」

「・・・」

明日菜さんは黙り混んでしまった。

「興味だけでこちらに入るのは良くないぞ神楽坂明日菜。」

「エヴァさん。聞いていたんですか。」

屋上の入り口の上にといたらしくこちらに近づいて来たところに話しかけた。

「ああ、サボっていたらいきなりお前たちが来たからな。」

「それはこちらの注意不足ですね。」

「まあ、それはどうでもいいか。」

「そうですね。」

そういうと私とエヴァさんは話を区切る。

「「どうします（する）、明日菜さん（神楽坂明日菜）？」」

私たちは声を合わせて明日菜さんに言う。

「わ、私は・・・・・・知りたい。私のことなのに私が知らないなんて嫌よ！自分のことを知りたい！！」

「・・・わかりました。では放課後にそろそろ時間ですから。」

強い意志に私は負けを認めた。

「約束よ!!」

「・・・はい。」

明日菜さんは屋上から降りて教室に向かった。

「すみませんタカミチ先生。私のせいで・・・」

「いいですよ。遅かれ早かれ知られる運命だったんだ。」

明日菜さんの去った階段からタカミチ先生が言った。私があらかじめ呼んでおいて隠れて貰った。

「で、神楽坂明日菜は何者なのだ？」

エヴァさんが聞いてきた。

「明日菜さんの記憶を戻す時にいいしますので。」

「今では駄目なのか？」

「お楽しみということ。」

「なら仕方ないな。」

エヴァさんは今はそれで抑えてくれた。

「アリサちゃん、さっき結界をかけた時に使った魔力って——」「ごさっしのとおりです。これも放課後に説明します。」

タカミチ先生の言葉を遮り私は屋上を降りるため階段に向かう。

「あつ、エヴァさん刹那さんの修行に別荘貸してもらっていいですか？さすがにダイオラマ魔法球は持ってませんから。」

階段を降りる前に確認する。ダイオラマ魔法球はかなり高い頑張れば買えなくはないが。

「かまわんど。それより早く呪いを解いてくれ。」

「今日にでもやりますよ。」

私はそういつと今度こそ階段を降りて言った。

side タカミチ

「あの姿といい力といいあの方の血を色濃く受け継いだのですね、アリサちゃんは。」

アリサちゃんが降りて言った後を見ながら僕は呟いた。

「あの方って誰だ？」

「それもアリサちゃんが説明しますよ。」

聞こえたらしく反応したエヴァに僕はそう言った。それは僕が言うべきことじゃあない。

side アリサ

私は今大量のプリントを持って教室に向かっている。今朝生徒たちに頼まれたものを運んでいるのだ。

「アリサ先生大丈夫？」

いきなり後ろから声をかけられた。止まって後ろを向くと私のクラスの前席番号六番大河内 アキラさんがいた。

「アキラさん、大丈夫ですYキャー!!」

大丈夫と言ってまた歩きだそうとしたけれど、躓いてこけてしまった。それとともにプリントが散らかってしまった。

side アキラ

目の前でおもいきりこけたアリサ先生を見て急いで駆け寄った。

「先生、大丈夫!？」

「うつつ、痛いです。」

涙目になっている先生。私は先生との身長が50cm近くある。上目遣い+涙目、さらに可愛いより綺麗な印象が強かったのでそのギヤップで効果抜群だった。

「ノアリサ先生拾うの手伝うよ。」

私は顔が熱くなるのを感じつつそう言った。

「お願いします。」

先生は素直に頼んで来た。私は自分でやると言われると思っていたので少し驚いた。

（ちゃんと頼むこともできるんだね。）

そう思いつつ綴じられたプリントの冊子を集めていく。

「あれ、これ英語だけじゃないんだ。」

プリントの中が見えたが回路図みたいなのが見えた。

「ええ、担当の先生に聞いて教科書を見せて貰ったんです。英語の他に、数学と理科をやりました。国語と社会もやろうと思ったのですけれど難しくて間に合いませんでした。」

「いや、短時間でこれだけ作るのもすごいと思うよ？」

（これは一人でできるようなものじゃない。英語だけならまだしも。）

冊子一つに約20枚、それが理科、英語、数学とあるのだから。

「回りの先生も生徒のためならと図を書くのとか手伝ってくれましたから。」

「そうなんだ。」

アリス先生はそれだけ回りの先生とも馴染めているということだ。

（こっちに来てまだ二日目なのにすごいな。）

side アリサ

プリントを集め終えて再び廊下を歩いている。アキラさんに半分プリントを持ってもらっている。なぜあそこにいたか聞くと職員室に用があつて行つてきた帰りだったそうだ。

「そういえば昨日ピアスなんてつけてなかったけどなんで今日はつけているの？」

「やつと昨日出来たんですよ。」

「出来たつて自分で作つたの!？」

「はい。こういうの作つたりするの得意なんですよ。」

そついうとアキラさんはまじまじとピアスを見た。

「ほんとだ製造社の文字とか入ってない。すごいなあ。」

「よかつたら作りましょうか？」

アキラさんが物欲しげに見ていたので聞いてみた。

「えっ、いいの?でも——」

「あつ、そうかアキラさん水泳部でしたね。ピアスは駄目ですね・・
・ネックレスでどうですか？」

「本当にいいの?」

「ええ、仕上がりは二、三日後になります。」

「ありがとうございます、アリサ先生。」

「いえ、可愛くなりたいと思うのは女の子の特権ですからね。それ

と先生じゃなくていいですよ。」

そんなおしゃべりをしていたらいつの間にか教室についていた。

side 明日菜

ホームルームが終わった。私はすぐに教室から出てアリサちゃんを追う。ちなみにアリサちゃんが作ったプリントはみんなに好評だった。とてもわかりやすかった。

「そんなに急がなくても逃げたりしませんよ。」

後ろから声が聞こえた。

「あれ？なんで後ろに？」

「さっき越したのはあなたですが？」

「そうだったけ？」

声の先にはアリサちゃんがいた。私は追い掛けることだけを考えて追い掛ける人を追い越していた。

「はあ、そうですよ。それと私はまだ仕事終わってないので。」

「そうだった。」

「じゃあ6時頃に寮の前で待っていてください。」

「わかった。」

side アリサ

私は明日菜さんと別れた後、図書館島にいる。

（日本史と世界史・・・後は古文でしたっけ？三年生になったら漢文もでしたね。五教科以外もやった方がいいでしょうか？）

旅で日本にも来たことがあるので日本語は翻訳の魔法がなくても理解でき、地理もある程度はわかるがさすがに文法や歴史は詳しくはない。だから、勉強のしようと思っ参考書を探しに来たのだ。

「届きませんね。いつ人が来るかわからないので魔法は使えませんし。」

そういつて回りを見回す。いくつか先にある本棚に梯子が立て掛けてあるのを見つけた。

「駄目ですね。すぐに魔法を頼っちゃ・・・」

そういつて梯子を取りに行く。ふと一冊の本に目が止まった。

「なんか、気になりますね。」

私はその本をとるとさっきまで参考書を探していた場所に戻り目当ての参考書をとると机の方に向かい、さっきの本を読み始めた。

side のどか

今日は放課後の後半のカウンター当番だった。今、閉館時間の五時半になったので人が残っていないか見回りをしている。いつもは残っていないのだが今日は違った。

「あつ・・・」

アリサ先生がいた。昨日教室に入ってきた時の凜とした姿を見た後からなぜか気になっていた。ハルナは禁断の恋が始まったと言っていた。(夕映はネギ先生に気を取られていた。)そんな彼女に声をかけようと思ったが、集中して本を読んでいる姿はとても綺麗で見惚れてしまった。

「ん？どうしたんですか、のどかさん？」

こちらに気付いたらしく声をかけてきた。

「あ、あの、閉館時間です。」

「もうそんな時間ですか？思いがけず読み耽ってしまいましたね。」

先生はそういうと帰り支度を始めた。

side アリサ

図書館島からの帰り。私はのどかさんと一緒に寮に向かっている。

「そつえばアリサ先生って図書館に何をしに来ていたんですか？」

のどかさんが聞いてきた。

「日本の歴史とか学ぼうと思いまして参考書を。」

「先生って勉強家ですか?」「そうでもないですよ?結構旅行してましたし。」

「旅行好きですか。」

旅をしていたので旅行で間違いないと思う。

「そういえば先生の作ったプリントすごくわかりやすかったです。みんなもそう言っていました。」

「それはよかったです。」

「でも、大変じゃないですか?英語以外にも作っていました。」

「ほかの先生にも手伝って貰いましたし。私はヒントと例題の解説を書いただけですよ。」

たしかに大変だけど生徒のためならと頑張れましたし。

「もしかして参考書を探していたのって・・・」

「ええ、国語と社会のプリントを作るためですが?」

「よ、よかったら手伝わしてくれませんか。」

「えっ?」

私はそのような質問が来るとは思っていなかった。でそんな声が出てしまった。

「て、手伝わせてください。そうすれば一緒に入れるから。」

「まあ、いいですが、最後の方なんていったんです?」

「な、なんでもありません。」

気になったが本人がいたくない時は無理に聞かない（そうでない時もあるが）。そう思っている内に寮に着いた。

「そうですか、ではまた明日。」

「はい。」

のどかさんと別れた後すぐに明日菜さんが出てきた。

「ちょっと遅かったかな？」

「大丈夫ですよ私も今来たところですから。」

そついい私は影に参考書を入れる。

「さあ、行きましょうか。あまり待たせるといけないので。」

「行くつてどこに？待たせる？」

「ついて来ればわかりますよ。」

side 明日菜

アリサちゃんについて来たところはログハウスだった。アリサちゃんがノックをすると扉が開いた。

「お待ちしてましたアリサ先生、明日菜さん。」

「茶々丸さん！！」

出て来たのは同じクラスの茶々丸さんだった。

「ほかの皆さんは？」

「マスター始めすでに別荘に入りました。」

「じゃあ私たちも行きましょうか？」

「はい。」

「えっ？えっ？」

私の前で訳のわからない会話が繰り広げられている。すると、

「ちゃんと説明しますのでとりあえずついて来てください。」

「うん。うん。」

そう言われてアリサちゃんについて行くと、ある部屋に着いた。

「この魔法陣に乗ってください。」

訳のわからぬまま魔法陣に乗ると魔法陣が光った。すると目の前に大きな西洋風の城が建っていた。

「あれ？このお城さつき丸いの入っていたような？」

「そう、その丸いの中ですよここは。」

私のつぶやきに答えるような声が聞こえた。

「せ、刹那さん！？」

「ダイオラマ魔法球と言っただな、この中の一日は外での1時間なんだ。」

「真名さんも！？」

クラスメイトがまたいたので驚いた。

「彼女たちは内の魔法生徒なんだよ。彼女たち以外にもいるけどね。」

「た、高畑先生!？」

「大丈夫だよ今の学園はアリサちゃんの味方だよ。」

アリサちゃんが学園に目をつけられていると聞いて警戒したが、高畑先生の言葉を聞いて安心した。

「遅かったではないかアリサ。では呪いを呪いを解いてくれ。」

「その前に明日菜さんの記憶を戻しますよ。多分明日菜さん気を失うと思うのでその間に。」

「「えっ!？」」

刹那さんと私の声がかぶった。後ろを見ると白いワンピースを来て茶々丸さんと並んでいるアリサちゃんがいた。

「気を失うつて?」「いきなり今までなかった情報が流れるんですよ?頭が情報を整理しようとして気を失うのは当たり前です。」

「そういうことですか。」

刹那さんが納得した。私も今の説明で理解した。

「では私は食事の準備に取り掛かりますね?」

「よろしく願います。」

そういうと茶々丸さんは城の中に入って行った。

「記憶を思い出させる前にして欲しいことがあるのですが?」

「えっ？何？」

「仮契約を・・・」

「仮契約？」

「魂で契約して魔力の供給や念話ができるようになり、アーティファクトというアイテムが得られるものだ。」

私の疑問にはエヴァちゃんが答えた。

「だが、そんなこと必要か？」

エヴァちゃんが聞く。そこでアリサちゃんは、

「保険ですよ。明日菜さんが自分を見失ってしまわないように。」

「自分を見失うって・・・」

「それだけ今のこいつには重い過去だと言うことか？」

私は冗談かと思って言おうとしたがエヴァちゃんの言葉にアリサちゃんが神妙に頷いたのを見て言葉を止めた。

「わかったその仮契約するわ。」

私はアリサちゃんが心配をしてくれていることを悟ってその心配を和らげるために決意した。

「といってもやり方を知らないものをいきなりやっ다고言ってもちよつと抵抗がありますよね？」

「・・・うん。」

side アリサ

「仮契約の仕方はいくつか方法があります。もっとも簡単なのは魔法陣の上でのキス。次はお互いの血を混ぜ合わせて魔法陣の上でそれを飲む。他に宝石を使うものや、相手を倒してから行うものがあります。今回は前者の二つのどちらかですよ。」

私は明日菜さんに仮契約の仕方を説明した。

「キスカ血を飲むかってこと？」

「ええ。」

明日菜さんはものわかりがよくて助かります。

「（…アリサちゃんなら）キスでいいわ。」

顔を赤くしながら明日菜さんはそういった。

「わかりま「よし、先に私とアリサで見本を見せようか！！」えっ！？」

了解しようとした時にエヴァさんが割り込んで言った。

「あ、あれだ／＼神楽坂明日菜がやったことないから実際に見せてやろうと思ってだな／＼」

「い、いいんですか？／＼」

「良くなかったらこんなこと言わん／＼」

私もエヴァさんも顔を真っ赤にしながら喋る。

「あの、先生・・・私も・・・その・・・仮契約してくれませんか！
？／／／」

「私も／／」

刹那さんと真名さんもそんなことを言ってきた。

「え？えっ？」

私は頭がパニックしてきた。

「私に自信をくれた先生に何かお礼したくて・・・よかつたら私も
従者にしてくれませんか／／」

「私も先生の従者にしてほしい。／／」

二人の理由を聞いている間に頭が落ち着いた。二人の真剣な表情に
私も決意した。

「わかりました。」

side エヴァ

仮契約をすると決まるとアリサは魔力で魔法陣を出した。

「普通チヨークとかで地面に書くのだから。（魔法の射手を撃つて
きたときも思ったがホントに魔力のコントロールが上手いな。）」

私は若干呆れ気味に言う。

「こっちの方が展開が早いんですよ。」

「だが魔力を使うだろ？」

「こんなの使った内に入りませんよ。あつ、魔力量の多い方がマスタ―になるように設定してますので。」

私は大きな魔法を主に使うからこの細かい作業だと必要以上に使うと思った。

「じゃあいくぞ。」

「はい。」

私はアリサを抱き寄せ唇を重ねる。すると魔法陣が輝き縦横比16：9のカードが現れる。

「契約成功だな。私はお前を縛り付けたりはしないからな。」

（この娘はどうあがいてもどこかに飛んで行ってしまう気がする。だったら飛び立つまで私のもとで羽を休めればいい。いや、出来たら私も一緒に飛び立とうじゃないか。）

そんな私の心を読んだのか、

「ありがとうございますエヴァさん。そしてよろしくお願いします。」

アリサは満面の笑みを浮かべて言ってきた。

「ああ、よろしくな。」

私も笑みを浮かべて帰した。

side 明日菜

（今度は私の番か）

「ここからは私がマスターですね。」

「そうだね。明日菜はアリサ先生より魔力量少ないし私たちはアリサ先生の従者になることを望んだからな。」

アリサちゃんに反応するように真名さんが答えた。

「私、アリサちゃんの心配がなくなるように頑張るから。」

「その調子なら心配いらないですね。」

「じゃあいくよ。」

「はい。」

私はアリサちゃんを抱き上げる。

「うわっ、何!？」

「こうすればキスしやすいかなって／＼」

そついいながら私はアリサちゃんと唇を重ねる。

（んっ？さっきの光と少し違うような。）

私は微妙に違う輝き方に疑問を持ったが気のせいと思いそのままに

した。

side 刹那

私は今さら女の子同士のキスについて疑問を持ったが、もうすると決めてしまったことなのでそんな考えを捨てて先生を抱き上げた。

「この感覚、昨日一緒に寝てくれたのは刹那さん立ったんですね。」
「い、嫌でしたか。」

私はアリサ先生に聞いた。

「いえ、とても温かかったです。まるで真っ白な羽に包まれているみたいでした。」

「ちよつと待ってください。」

私はそういつと翼を広げた。

「刹那さんあの時の鳥族だったのですか。」

「あの時？」

「私、実は一度刹那さんと手合わせしているんですよ？」

「えっ!？」

「四年前、旅に出てすぐに日本に来て詠春さんのところに会いに行つて日本の剣術の基礎を学んだのですよ。」

「えっ、でも。」

私は覚えがない。金髪で緑と青のオッドアイでこんなに目立つのに。

「あの時は魔法で髪を黒く染めてカラーコンタクトも黒にしていたから気がつかなくても無理ないですよ。あの家にいたのも一週間くらいでしたし。手合わせしたのも出立する日でしたしね。」

そう言われた時私は思い出した。四年前ある少女と手合わせしてこてんぱんに負けた。自分より年下の少女に翼まで出して負けた。その少女は強い覚悟を持っていた。そして、その少女が私に残した言葉をバネにして頑張っていたことを。

「『護る覚悟のある者は強い。でも、自分すら護れない者は誰かを護ることなんてできない。自分を犠牲にするのは本当に最終手段です。』でしたっけ。あの時アリサ先生の言葉は。」

「はい。思い出していただけましたか？」

「私はその言葉を守ってるつもりでした。でも、結局私は自分も木乃香お嬢様も犠牲にしていた。」

「まずは自分を知ることからですね。自分がどうしたいか、どうありたいか。」

「今度こそあの言葉を守れることを誓います。この仮契約はその契りです。」

私そついうとアリサ先生を翼で包むように折り

「これからあなたも護ります。」

と、いうとアリサ先生と唇を重ねた。

（やはりどこか違うような。）

明日菜さんと仮契約した時の変化にも気がついていた。

（エヴァさんと仮契約した時と精霊たちの舞い方が違う。）

そう思ったとき仮契約が完了した。

明日菜さん同様コピーカードを刹那さんに渡した。

side 真名

なんか仮契約の時の魔法陣の輝き方が変だが別に失敗はしていないので関係ない。

「アリサ先生は私に興味を持たせてくれた。私はあなたのことをたくさん知りたい。そしてあなたについていくよ。」

「その覚悟、しかと受け止めました。」

アリサ先生がそういうと私は彼女に唇を重ねる。

（これは！！！）

その時私の魔眼に映った者に驚いた。どうやらアリサ先生も気づいたらしい。

side アリサ

(ようやく解りました。でも・・・)

「皆さん、仮契約する時少し輝き方が違うのに気づきました？」

私は真名さんにコピーカードを渡してから話し始める。

「ああ。」

「うん。」

「はい。」

「もちろん。」

みんな気づいてたようだ。

「実は精霊たちが私の力に干渉して仮契約だけど本契約のような状況になってしまいました。」

「「「はい？」」」

真名さん以外そんな返事が帰ってきた。

「私がマスターになった方が特に、魂が強く結びついて破棄不能として私と同じ不老不死になっちゃったみたいです。」

「「本当に!？」」

「すみません。私の所詮で。」

「不老不死ってことはずっと一緒ってことだね。」

「えっ!？」

「アリサ先生と別れる人が減ったということだね。」

「ということは私がアリサ先生の支えになれるということですね。」

何と言うポジティブ思考と私の頭に過ぎった。

「本人たちがいいならいつか。」

「そうだな。というかアリサ、敬語使わなくても話せるじゃないか。」

「これからは、ここにいる人達になるべく敬語を使わず話せるようにしようかと。」

「その方がいいだろうな。」

6 時間目「仮契約」（後書き）

アーティファクトと能力どうしましょう？明日菜はハマノツルギで決定ですがアリサ、刹那、真名のアーティファクトが・・・自分でも考えますが何か案があつたら感想をお願いします。

7 時間目「解説」（前書き）

アリスのアーティファクトはこちらで決めたので、刹那と真名のアーティファクトの案があったら9月6日の23時59分まで受付ますのでどうかご意見よろしくお願いします。

7 時間目「解説」

side アリサ

「では、行きますよ。」

「う、うん。」

私は明日菜さんの記憶を戻すため普通のより特殊な術式を組んだ魔法陣に明日菜さんを誘導する。

「それよりアーティファクトの確認をしなくていいのか？」

エヴァさんが尋ねてきた。

「そっちはいつでもできるので今、やらなければいけないことをやるうかと。エヴァさんの方でもありますから。」

「そうか・・・そうだな。」

エヴァさんは思い出したように笑った。

「では・・・」

私がそう言うとエヴァさんが少し後ろに下がり、明日菜さんからは唾を飲む音がした。

「スピリット・ソウル・マイ・ピース 闇よ光よ混じり合いて彼のを戒めし力を解き放て 【暁の目覚め】」

私が咏唱すると魔法陣の回りから濁った光が現れ、明日菜さんを包み込む。すると、いきなり輝き出す。その輝きが収まるとともに明日菜さんの体が傾きだす。

「【魔法の射手 戒めの風矢】」

私は戒めの風矢で傾いた体を支えた後明日菜さんに近づく。明日菜さんからは規則正しい寝息が聞こえた。

「終わりましたか？」

刹那さんも明日菜さんの様子を見に来たのか近づいて来た。

「ええ、しばらく目を覚まさないと思うので、明日菜さんを寢床に連れて行ってくれませんか？」

私では身長差で運ぶのは無理。魔法で連れて行ってもいいが明日菜さんとなると時間と魔力がかかる。今、戒めの風矢でもかなり魔力を使っている。だから刹那さんに頼んだ。

「わかりました。」

刹那さんがそう答えると私は戒めの風矢を解いた。すると刹那さんは少し慌てながら明日菜さんを抱えた。いわゆる、お姫様抱っこである。

「では、お願いします。」

「はい。アリサ先生。」

刹那さんが城に入って行くのを確認すると少し息を吐く。

「さっきのは光と闇の合成解呪魔法かい？」

真名さんが隣に来て聞いてきた。

「ええ、どちらかだけにすると偏って思い出しますからね。すべてを思い出すにはやはり光と闇を混ぜ合わせなければいけません。」

「そうだな。神楽坂明日菜がそれも覚悟していたかはわからないがな。」

「

エヴァさんも納得して言った。

「さて次は私の番だ。頼むぞ。」

「ええ、まずは術式を見るので準備ができるまで待っていてください。」

side エヴァ

アリサは待てと言って目を閉じた。

「月詠 【解除】」

そう唱えるとアリサから感じる魔力の質が変わった。

「声に反応する封印術式か・・・お前から真祖の力を感じなかったのはそのせいかな。」

「はい、少し慣れないのでこれなら切り替えができるので。」

「そうか、手加減はたしかに面倒な練習だからな。」

真祖になると魔力が上がるだけでなく筋力も上がる。私はアリサの言葉に昔を思い出しながら頷いた。

「コントロールは得意分野なのですぐ慣れると思います。今日は10%くらいで過ごしてました。」

アリサは話しながらも、魔法式をだすために魔力を練る。

「そうか。そういうば一つ言い忘れていたが私の魔力は登校地獄ではないもので封印されていると言うことが最近になってわかった。」

登校地獄はただ端に登校させるための呪い。魔力を封じる力はない。

「というと？」

「学園結界だ。茶々丸のおかげでわかったんだが最近の魔法使いは電気に頼っているらしくてな、そこまで気が回らなかった。」

「ということは一回学園結界を解かないとその封印は解けませんね。」

アリサは理解力があって助かる。説明が簡単でいい。それに口を動かしていても体の動きが止まらない。今は魔力で魔法陣を構築している。

「大丈夫だ。その目星はついている。その時ついでに坊やの実力を見ようと思う。」

「なら安心ですね。それと、甘やかされて育ったんで期待しないほうがいいですよ。っと、準備できました。」

いつの間にか魔法陣が完成していた。私は言われずとも魔法陣の中に入った。すると登校地獄の術式が浮かんだ。

「うわあ・・・かなりいい加減な上に複雑な術式ですね・・・」
「ホントにな・・・」

半ば呆れて会話する。本当はかなりいい加減である。

side アリサ

「これしかけたのが自分の親だと言っのがかなり残念です。」
「先生、同情します。」

いつの間にか戻って来ていた刹那さんが肩に手を置いて言った。

「私は魔法のことはわかりませんがこの術式がかなり雑だと言っのはよくわかります。」

「流石はナギさん・・・といえいいかな？」

素人でも解るほど雑なのだ。タカミチ先生はもうどう表現したらいいのかわからないようだ。

「雑すぎて逆に解きづらいですよ。」

「見た目は雑だがしっかり組まれているからね。これは難しいよ。」

私の声に真名さんが反応した。

「解くのが難しいのなら、打ち消します。」

「打ち消す?」

「ええ、理論上かかっている呪いの全く逆の効果の呪いを同じ魔力量でかければ打ち消すことができます。」

「だから解放したのか?」

「ええ、多分こうなると予想できましたから。」

私は溜め息をつく。予想が的中したことで、自分の父親が本当にアホだと言っのがわかったことで。

「先生、元気出してください。」

そこへ茶々丸さんが来た。きつと食事の準備が終わり、主人の呪いが解けるのを見に来たのだろう。

「ありがとう、茶々丸さん。はあ、もうなんか疲れました。もう、名前・登校拒否でいいや。」

((何と言う投げやりな!))

アリサの言葉に回りは心の中でつつこむ。だが、エヴァは、

(なんか、懐かしいな。)

と、ナギの姿と重ねていた。

封印の術式はかなり雑になっている。そして完成に近づくと・・・

ピシッ

ピシシシ、パキン!!

空気の割れるような音が聞こえた。

「これで打ち消されたはずです。どうですか？」

「ああ、枷が取れたような気分だ。」

「ということはマスター封印の一つは解けたのですね。」

「後は学園結界だけだ。頼んだぞ茶々丸。」

「はい。」

茶々丸さんは嬉しそうな顔をして返事した。

「茶々丸さん、いい笑顔ですね。」

「えっ!？」

「気づいてなかったのですか？さっきのは嬉しそうでとてもいい笑顔でしたよ。」

「これが、嬉しいという感情ですか。」

茶々丸さんは手を胸の前で組んで目を閉じながらそう言った。そして、また嬉しそうに笑った。それをエヴァさんは子を見守る親のような顔で穏やかに微笑んでいた。

7 時間目「解説」（後書き）

ワルツ「出番がないニヤ・・・ということどこはしばらくおいらが仕切るニヤ。次回は多分、おそらく、きつと明日菜の記憶に関してニヤ。」

アリサ「ワルツ・・・何と言う曖昧な表現ですね。」

ワルツ「だって作者がハッキリしてNミヤー!!」

アリサ「ワルツ・・・その先を言ったらもっと出番がなくなる可能大ですよ?」

ワルツ「そ、それは困るニヤー!!」

アリサ「という訳でそろそろお時間です。」

ワルツ「話しが繋がってないニヤー!!」

アリサ「それでは皆さん。」

ワルツ「無視かニヤー!!」

アリサ「次回お楽しみにー」

ワルツ「ああ、おいらの出番が・・・」

8 時間目「過去」(前書き)

事前申告

最後の方かなりグダグダです。無理矢理繋いだようなものになりました。

8 時間目「過去」

side 明日菜

——俺達、紅き翼は最強だ！——嬢ちゃん名前は？——アスナが良い名前だな——待ってなアスナ全部終わらせてやるからな——楽しいかいアスナちゃん？——おいタカミチ越されてるぞ？——

次々と流れる明るい記憶。それとともに、

——何百人の命を奪ってきた化け物め——すまぬなアスナ——
——師匠！——煙草をくれタカミチ——嬢ちゃん幸せに生きるんだ。君にはその権利がある——

暗い記憶。自分がたくさんの人を殺めてきた事実が私を押し潰そうとする。

「わたしは……」

起きてからかれこれ（別荘内で）一日こうしている。食事は茶々丸さんが持って来てくれた。でも、食欲で湧かずほとんど残していた。

「やはりこうなっていましたか。」

「……アリサちゃん。」

side アリサ

エヴァさんの封印を解いた後、慣れない真祖の力をいきなり100%で使ったせいか、立ちくらみを起こしてしまった。だからエヴァさんがかなかな明日菜さんのところに行かせて貰えなかった。そしてここに来たら案の定こうなっていた。

「どうですか、記憶を思い出して？」

「・・・正直こんななんて。」

いつもの明るさがなく萎れている。

「あなたが望んだことですよ？」

「うん、それはわかってるわ。だけど、これからどうしたらいいかわかんなくなっちゃった。」

明日菜さんはハハツと笑い声をあげた。

「明日菜さんは明日菜さんらしく今までのままでいいんじゃないですか？」

「私らしく・・・か。」

「それでも躓いたなら私も力になりますよ？姉様？」

「「あ、姉様って（だと）（どういうことですか）！？」」「」

side エヴァ

気になってアリサの後をついて（付けて）来た。ほかの連中もついて来たが気にしない。そして、さっきの姉様発言で私と刹那が飛び出してしまった。

「私と明日菜さんって血が繋がっているんですよ。ねータカミチさん。」

「えっ!？」

「本当かタカミチ!？」

アリサがそういうと私はタカミチに声をかけた。刹那はキョトンとしている。

「まあ、たしかに血は繋がっているね。明日菜君もアリサちゃんの容姿を見たら解ると思うよ?」

「えっ?・・・あつ、そういえばかなり似てる!」

タカミチと神楽坂明日菜がこういうと言うことはほんとなのだろう。

（血が繋がっているなんて、なんと羨まし——ん?てことは?）

不意に桜咲刹那と龍宮真名と目があった。こいつらも同じ事を考えているらしい。

「『アリサ（先生）と坊や（ネギ先生）は魔法無効化能力を使えるのか（のですか）（のかい）?』」

明日菜とアリサ先生が血族だと言うことはわかった。ということは必然的にネギ先生も血族だと言うことは解る。魔法無効化能力はウエスペルティアの王家の魔力と聞いたことがある。

「私は使えます。ネギはおそらく使えないと思います。」

私たちの質問に簡潔に答えてくれた。

「そうか、それで・・・なんで姉様なのか教えてくれるかい？」

「タカミチさんに母様と明日菜さんは姉妹のような関係だったと聞いて本当は叔母様何ですが年が近いし、それに・・・」

「・・・それに？」

アリサ先生の声はだんだんと小さくなっていった。

「寂しかったから・・・（ボソツ）」

side
アリサ

恥ずかしい！！恥ずかし過ぎる。私は馬鹿にされるかと思い目を閉じた。だが、そんなことは起こらなかった。

「アリサ・・・一人ぼっちだったんだね。」

「えっ？」

起こったことは明日菜さんが私を抱き寄せ、エヴァさんが頭を撫で

てくれた。刹那さんと真名さん、茶々丸さんは温かな眼差しで見てくれた。

「面倒を見てくれる人はいたかもしれんがなそいつの心は坊やに行っていたのだろう？昨日からわかつていたがなかなかタイミングが掴めなかったからな。」

「マスターはそういうのは不器用ですからね。」

「茶々丸そういう余計なこといな！！」

エヴァさんは茶々丸さんに言い返すが私の頭から手を離さなかった。

「アリサ先生もつと甘えていいんですよ。」

「そうだ、今までの甘えれなかった分私たちに甘えればいい。」

刹那さん、真名さんが言う。目に熱いものが貯まって来る。

——アリサなら大丈夫——アリサはともかくネギは——

昔からそう言われてきた。ひと時、兄と一緒に馬鹿をやって見た。その時も私より兄の方が優先された。失望した『私のことなんてどうでもいいんだ。』そう思うようになった。それから私は感情をあまり外に出さないようにした。麻帆良に来て初めてあった私を心配してくれた人がいた。だから勇気を出してみた。

「寂しかったんでしょう？だったら今、泣いていいのよ？」

抱きしめる力が強くなる。ついに涙が溢れてきた。

しばらく泣いていた。それが恥ずかしく思い赤くなって縮こまってしまった。

「これからは私たちが側にいますよ。」

「私たちは先生の仲間だ。」

「何だったら私たちも姉と呼んでいいぞ?」

「マスターは実は呼んで欲しいらしいです。」

そんな言葉が掛けられる。

「はい。でも、なかなか呼び慣れないと思うので。」

「そうか。」

茶々丸さんに反応していたエヴァさんは少し残念そうに答えた。

「そろそろ戻んなきゃね。外ではもう8時だよ。」

明日菜さんがそついう。

「そつですね。警備の方もありますし。」

「そつだな。」

そつして魔法球から出るとエヴァさんに挨拶して寮に向かう。

「そつだ、アリサ先生が来てすぐだから一週間くらい出なくていいつて言われてたんでした。」

「だったら、もう少しいてもよかったな。」

「そつですね。」

そんなこともありつつ夜は更けて行く。

8 時間目「過去」（後書き）

ワルツ「作者から一言あるニヤ。『こんなグダグダな文を読んでくれてありがとうございます。』だそうだニヤ。なんだ、本人も――

「ワルツそれ以上は禁句ですよ。」

ワルツ「そうだったニヤ」

アリサ「本編ですら出番が少ないんだから。」

ワルツ「作者様大変失礼いたしましたニヤ。」

休み時間「アーティファクト」(前書き)

アーティファクトの紹介です。ご意見くださった方々誠にありがとうございました。

休み時間「アーティファクト」

主 A T H A N A S I A E C A T E R I N A M A C D O V E L
L E V A N G E L I N A

名前表記 A R I S A S P R I N G F I E L D E S

称号 S P I R I T B E L O V E D D A U G H T E R (精霊
たちの愛娘)

色調 P r i s m (虹)

徳性 c a r i t a s (愛)

方位 c e n t r u m (中央)

星辰性 f a x (流星)

アーティファクト 無限の絆

主 A R I S A S P R I N G F I E L D E S

名前表記 C A G U R A Z A C A A S U N A

称号 B E L L A T R I X S A U C I A T A (傷付いた戦士)

色調 R u b o r (赤)

徳性 a u d a c i a (勇気)

方位 o r i e n s (東)

星辰性 M a r s (火星)

アーティファクト ハマノツルギ

主 A R I S A S P R I N G F I E L D E S

名前表記 S A C U R A Z A C I S E T U N A

称号 G L A D I A R I A A L A T A (翼ある剣士)

色調 N i g r o r (黒)

徳性 j u s t i t i a (正義)

方位 s e p t e n t r i o (北)

星辰性 S o l (太陽)

アーティファクト 無銘の剣

主 ARISA SPRINGFIELDES

名前表記 ARCANAMANNA

称号 DEVILEYE SNIPER（魔眼を持つ狙撃手）

色調 nigror（黒）

徳性 temperantia（節制）

方位 oriens（東）

星辰性 Luna（月）

アーティファクト 無限の銃庫

アーティファクトの能力

・無限の絆

…形状はマント。どんな契約でも結んでいる相手ならどこにいても念話・召喚ができるようになる。また仮契約カードを収納するスペースもあり従者のアーティファクトも使える。さらに、マントから無限に糸が出てくる。浮遊術を使う時その糸に少しでも触れていると使用者の意思で一緒に飛ぶことができる（逆もあり）。武器としても使える。

・ハマノツルギ

…原作と同じ。追加能力でアリサと契約している精霊の力なら纏えるようになった。

・無銘の剣

…銘刀の名をいえばその刀に変わり、頭で想像した刀にも変化する（双剣もあり）。これも、アリサと契約している精霊の力を纏える。

・無限の銃庫

…どんな型の銃も出てくる。球は使用者の魔力から形成される。これにアリサと契約している精霊を混ぜ合わせて撃つことができる。

休み時間「アーティファクト」(後書き)

真名「これで銃を持ち歩く必要が無くなったな。」

アリサ「ということは銃弾いらなくなったのでは。」

真名「そうでも無いようだよ。普通の銃弾も入れれるようだ。」

アリサ「そうですか。なら無駄になりませんね。」ドサッ!!

真名「こんなに・・・どこで作ったのやら。」

アリサ「前もいったとおり企業秘密です。」

刹那「アリサ先生!!これ、夕凧にもなりました。」

明日菜「この剣でかいわね。」アリサ「これからは、三人で剣の特

訓ですね。その方に私は糸を使った戦法も。」

エヴァ「それだったら私が教えてやろう。」

アリサ「ほんとですかだったらよろしくお願いします。」

茶々丸「・・・仮契約ですか。」

9 時間目「図書館島」(前書き)

投稿完了!!

9 時間目「図書館島」

side - - -

アリサが麻帆良に来て数週間。アリサは着々と回りの一般職員と信頼関係を作っていた。魔法先生とも信頼関係を作っているが中にはエヴァとともに行動をしているのをよく思わない人もいた。エヴァの呪いを解いたことも問題になったが学園長とタカミチが収めた。最近兄との中も良好になってきた。そもそも長年話をしていなかったから話さなかったただけだが最近は教職で話すようにもなってきた。クラスのみんなども馴染んできた。時々どこかに本を紹介されたり、刹那と剣の修業をしたり、明日菜と魔法無効化能力の鍛練をしたり、茶々丸と料理の創作をしたり、木乃香と麻帆良を散策して着せ替え人形にされたり、アキラと対策プリント作ったり、ネギが馬鹿やつたり・・・ate

そして今、ネギと学園長に呼ばれて学園長室にいる。

side アリサ

「・・・はっ？」

私は今学園長に呼ばれてネギと一緒に学園長室に来ていた。

「じゃから、ネギ君とアリサ君には立派な魔法使いとしてのの試練を受けて貰う。」

何言っているのだろうこの老いばれは？そもそもアリサには立派な魔法使いになる気なんてさらさらない。それにこの老いばれをいまだに信用できない。

「で、その内容はなんですか？」

だが形だけでもやっておこうと思ひ内容を聞く。

「それはじゃな、2・Aを期末試験で最下位から脱出させて欲しいのじゃ。そしたらちゃんとした教員免許も渡そう。」

「「えっ！？そんなことでいいのですか？」」「
「ほっ！？」」

学園長はネギはそう言うだろうと思っていたが、アリサまでそう言うとは思っていなかったようだ。

「そんなに簡単ではないと思うがの？もし試験に落ちたらウェールズに戻って貰うのだぞ？」

「「わかりました。その試験受けます。」」

そう言う私たちは、学園長室から出た。

side ネギ

学園長からだされた課題は案外簡単そうだった。

「アリサ、昨日遅くまで残って試験対策のプリントを作っておいてよかったね。備えあれば憂いなしだね。」

そう、アリサがやり始めたのだが氣になつた僕が聞いたところ流石に最下位のままはかわいそうだと思つて作つていたらしい。それに僕も賛同して手伝つていた。まさかそれが課題になると思わなかつた。アリサとはまだちよつとギクシャクすることがあるけど、頑張つて普通の兄妹みたいな中になろう。

「魔法のことは伏せて試験のことを皆さんに話しますので。」

「えっ!？」

「その方皆さん燃えますから。」

アリサの言葉を聞いて確かと思った。

Side
明日菜

記憶を思い出してから勉強もはかどるようになった。私が勉強できるようになってからクラスの勉強意識が変わっていた。相変わらず賑やかで授業中も騒いだりするが、アリサちゃんが作ったプリントだけはちゃんとやるようになっていた。これ、かなりわかりやすい。この前古　菲のプリントは中国語で書いてあるのを知った。よく見るとみんなに手書きでアドバイスを書いていたらしい。このプリントは月曜に渡されるので土曜に学校に行っている理由がわかった。

（手伝ってくれる人から大丈夫って行っていたけど、今度私

も手伝いに行こうかな？)

木乃香と喋りながらそんな考えをしていたらアリサちゃんとネギが教室に入って来た。私はぶっちゃけアリサちゃんが担任のほうがいいと思う。ネギはすぐ馬鹿をやらかすから。

「今日は皆さんにお知らせがあります。」

いつもならネギが連絡事項を喋るのにアリサちゃんが話し出した。いつもならほとんど聞き流しているけど今日は何やら重大なことのようなのだ。

side エヴァ

「今朝、教育実習生としての試験を受けました。その内容は・・・皆さんを学年最下位から脱出学年最下位から脱出させることです。」

すらすらと用件を述べたアリサの言葉でこの教室の空気が凍りついたような音がした。

「あ、あの、先生。ち、ちなみにその試験落ちるとどうなるんですか？」

宮崎のどかが最近アリサ関係のことだとこのクラスの中でも声をあげれるようになって来たな。

「もし試験に落ちたら私もネギ先生も皆さんとお別れしてウェール

ズに帰らなければいけないそうです。」

『ええーっ！？』

クラスの連中が声をあげた。うるさいことこの上ない。

（これはジジイのあれだな。これから楽しくなると言うのに・・・ちよっと待てよここで言うと言うことは何か策があるのか？）

私は無理難題だと思ったがアリサの顔は自信に満ちていた。

「これは学園長が出した試験です。」

アリサがその名詞を出すと学園長の悪口がどこからともなく聞こえてきた。

「そこで！！皆さんの今までの成果を学園長に見せて愕然とさせてやりましょう！！」

『オオーっ！！』

クラスの連中が揃って声を上げる。

（クククッ、そう言う魂胆かしかも遠見で見れないようにしてるとは。おもしろそうだから私もその作戦にのろう。）

《茶々丸、今回は手抜き不要だ。》

《了解しました。マスターもアリサ先生がいなくなっただけだ。嫌なだけだ。》

《『も』とはなんだ、私は唯つまらなくなるのが嫌なだけだ。》

《ですが、アリサ先生がウェールズに帰らなければいけないといった時に真っ先に反応したのは・・・ブッ》

茶々丸がまた厄介なことを行っていたきそうなので念話を切った。

side - - -

二、三日後の夜大浴場で馬鹿レンジャーと呼ばれていた面子＋木乃香、のどか、ハルナが話し合っていた。

「私達、アリサちゃんが作ってくれたプリントのおかげで前よりは勉強できるようになったわよね。」

「案外出来るかもしれへんよ?」

「自信でないでござるよ。」

「でも、ネギ君とアリサちゃんと別れたくないよー!!」

「——ここはやはり・・・あれを探すしかないかもです・・・」

何かよくわからない飲み物を飲みながら綾瀬夕映がいった。

「あれって何アルカ?」

「それは——」

side アリサ

午後9時。

「・・・・・・眠い(ボソツ)。」最近遅くまで起きていたアリサは寮

の部屋でそうつぶやく。でも寝てない理由は、

コンコン。

さつきからなっているドアを叩く音。真名さんと刹那さんは夜の警備に行っている。警備が休みの時はどちらかと一緒に寝たりもしている。ていうか普段起きたら違う布団にしていることが多々ある。そんなこと今は関係ない、居留守をしようと思ったが相手もなかなかしぶとい。結局折れてパジャマのままおぼつかない足取りで玄関に向かう。

「ふあゝあ。どちら様ですか。」

そっぴいながらドアを開ける。

「夜遅くゴメン、アリサちゃん!!」

「明日菜さんですか、どうしたの?」

ドアを開けると明日菜さんと木乃香さんそれになぜか兄がいた。

「ちょっと耳貸して。夕映や木乃香たちが図書館島に行くことになったの、それで心配だから私もついて行くことになったんだけど、私だけじゃちょっときついと思ってアリサちゃんに手伝って欲しいんだけど。」

「んー?べつに構いませんけど?今日中に戻って来れそう?（多分、学園長の仕業でしょうね。木乃香さんの護衛の件、刹那さんの変わりに受けますか。）」

おぼつかない頭の中で考えた私。多分、学園長が途中で絡んで来ると直感で感じたのでついて行こう。

「うーん、一日じゃあ無理かな？」

「じゃあ、行く人から髪を一本貰って。分身を作るので。」

学校を休んだことにしないためにそういった。あのジジイに借りなんて作りたくないですから。そう考えている間に頭が冴えてきた。でも眠い。

「大丈夫！さっきお風呂で取ったから。」

「ふあゝあ。準備いいね。ちょっと待っててね。」

そういうと私は奥に戻り分身を作って各部屋に送る。髪を必要としたのは、その人の個性をちゃんと出すため。

「【来れ（アデアット）】」

私はこのままじゃあ寒いと思ったので、アーティファクトのマントを羽織り自分の分身を作った上で玄関に向かうやはりその足取りはおぼつかない。

side 明日菜

（やっぱり学園長が絡んでたのね。）

じゃないとアリサちゃんがそんな簡単に了承するわけがない。

「ところでなんで兄がいるんですか？」

アーティファクト・無限の絆を羽織ったアリサちゃんが再び出てきた。おそらく分身を作っていたのだろう。

「それはやな、まき絵がぎょうさんいたほうが楽しい言ったださかい。」

「そうですか・・・では行きましょう。」

木乃香の返答に反応するとアリサちゃんはおぼつかない足取りで歩き出した。

side 木乃香

（あれは、危ないわ。）

アリサちゃんの足取りを見てうちはそう思った。

「アリサちゃん、大丈夫!？」

明日菜もそう思ったらしくアリサちゃんに声をかけた。

「大丈夫ですよ。」

アリサちゃんはおぼつかない足取りのまま答えた。どこからどうみても大丈夫そうじゃない。

「仕方ないわね。」

明日菜はそう言つと眠そうなネギ君を抱えてアリサちゃんの前に行く、

「ほら、来なさい。どうせ最近ろくに寝てないんでしょ？」

明日菜はアリサちゃんの前で屈み背中を指しながらいいおった。アリサちゃんはそれに素直に従いコクツと頷くと明日菜の背負ってもらう。うちが明日菜のところまで行くとアリサちゃんもう寝てたわ。

「可愛いなー、アリサちゃんの寝顔は。」

明日菜の背中でスヤスヤ寝とるアリサちゃんを見ながらうちは言う。

「そうね、なんで私たちの方に来なかったんだろ。」

「せつちゃんはいつもこんな寝顔見とるんやな。うらやましいわ。」

「せつちゃんって刹那ちゃんのこと？」

「そやよ。」

side 明日菜

私が刹那ちゃんの名前を出すと木乃香の表情が沈んだ。私は木乃香を元気づけるために言う。

「この前ね、刹那ちゃんと話したとき刹那ちゃん悩んでたんだよ。」

「せつちゃんが？」

「うん、木乃香のことだね。昔の関係に戻りたいって行つてたけど何かが突っ掛かるらしいの。木乃香は昔の関係に戻りたい？」

「もちろんや!!」

「じゃあ、刹那ちゃんを信じて待っていてあげて。後は刹那ちゃん言い出せるきっかけさえあれば話すと思うわ。」

そついうと木乃香は、

「わかった。ありがとな明日菜。はつきし言っつうち、せつちゃんとのこと諦めてかけてたわ。でも今のを聞いて自信ついた。」

「そつか、よかった。」

そついい私たちは歩き出した。

side 木乃香

「それにしても以外やわー。子供嫌いな明日菜がアリサちゃんと姉妹みたいに仲がええのは。」

図書館島に向かう途中、さっきの光景を思い出して明日菜に言った。

「アリサはそこらのガキとは別格よ。礼儀もいいし。」

「そやね、ホンマにできた子やよな。料理も出来るし裁縫も出来るし。将来いいお嫁さんになるやろな。」

何回か一緒にお菓子作ったりしたけどホンマ、手際ええし。ちょっと悔しいわ。

「お嫁さん……か。」

よう聞こえんかったけど明日菜が何か呟いて遠くを見つめていた。

「明日菜、どした？」

「えっ！？いや、なんにも！！」

明日菜がそういったので気にしないことにした。

「・・・ん？」

明日菜の背中から声が聞こえてきた。

「明日菜がおつきな声出すからアリサちゃん起きてしまったえ？」

「えっ、ごめん。」

「んー？」

明日菜が誤つとるがアリサちゃんはわけがわからないような声を出した。

「明日菜、図書館島までもう少しあるさかいかわるか？」

「いいの？流石に私も二人は辛いと思ってたとこなの。アリサ、悪いけど木乃香の方に行ってくれる？」

「うん。」

アリサちゃんは明日菜の背中から降りてうちの方に来るそしてアリサちゃんをうちがおぶる。それにしても素直なアリサちゃん可愛ええな。授業の時は凜として綺麗やしギャップがたまらんわ。

s i d e アリサ

目が覚めたら図書館島の中にいました。そして今は本棚の上を歩い

ている。私はネギ先生に小声で話しかける。

「ん？ネギ先生魔力を感じませんが？（ボソボソ）」

「テストまで封印することにしたんだ。それとここで先生付けはやめない？（ボソボソ）」

「癖になったみたいです。それとどうせ自信を持たせる魔法を使おうとして明日菜さんに止められたのでしょうか？」

「ギクツ！なんでそれを？」

「あなたの考えそうなことです。ですが、生徒自信がちゃんとした自信を持たないと意味ないです。魔法で作ったまがい物の感情なんて。」

「・・・ごめんなさい。」

私の言葉にネギ先生は誤ってきた。

「ですが、そのことに気づいて教師として見ようとしたのはいい判断です。」

「ありがとう。」

彼は褒めてもらえたのが嬉しいらしく笑顔になった。

（・・・面倒な人）

私はコロコロ顔が変わる自分の兄に心の内でため息をついた。

s i d e - - -

それからしばらくトラップ（問題）をかい潜り、石像があるところまでたどり着いた。ネギは魔法の本を見つけてはしゃいでいる。そしてゴーレムが動き出しゲームが始まった。生徒だけでやらなきゃいけないらしい。そして最後の問題で『おさら』の『ら』を明日菜とまき絵が押そうとした時。

「それ押すの待ってください！」

アリサが押すのを止めた。

side 明日菜

私たちが最後の文字を押そうとしたらアリサちゃんに止められた。

「アリサちゃん、どうしたの？」

触る直前になにかに引っ張られた。これはアリサちゃんの糸だ。

「生徒だけのルールじゃが？」

「そちらが不正を行ったのですが？」

「フオツー！」

アリサちゃんがさういうとさっきまで『ら』のボタンだったところが『る』にかわっている。

「こんな茶番付き合っていられません。皆さん帰りましょう。」
「でも、魔法の本がー！」

「ん？このことですか？中はただのテキストですよ。」

「「「いつの間に！！」」」

「さっき系を使って取っておきました。」

私が本を持っていたことを驚いていたが、ここまでに来る途中でも系を使っていたので納得したようだ。中身はさっき影から取り出したテキストとすり替えておいた。

「というわけで帰りましょう。ここに来るまでの問題で自信ついたでしょう？」

「そうね、ただのテキストだったんならこれやってる意味ないもんね。」

「そやね。帰るか。」

「結構自信ついたもんね。」

「私は面白そうだったからきたアルシ。」

「拙者も。」

「長い一日だったです。」

それぞれが帰ろうとする。

ドスン。

するとゴーレムが適当なボタンを押した。すると地面が崩れはじめた。

「えっ・・・キヤーー！！」

side アリサ

「ふう、なんとか間に合ったです。」

私は落ちそうになったみんなを糸で捕まえていた。ゴーレムは邪魔されないように縛ってある。とりあえず魔法を使うわけには行かないので力のある明日菜さんと古 菲さんを引きあげる。その間ほかの糸はそこらの柱に繋いでおく。

「アリサちゃんありがとう。危機一髪だよ。」

「助かったアルヨ。」

「いえ、それよりもほかの方々を。」

「うん。」

side 木乃香

いやアリサちゃんのおかげで助かったわ。でもあの糸なんだったのやろ。アリサちゃんはピアノ線言うつたけど。まあええ今はそれよりも・・・

「さてこのおそらくロボットの石像をお仕置きしましょう。《さて学園長覚悟はいいですね?》」

「フオッ!! 《術が解けん・・・そうか解除は三日後の予定じゃったから。》」

「じゃあ皆さんで一斉攻撃《それは好都合。あつ、ちなみに痛覚は学園長が受けるように術式変更しましたから》。」

「「「おおー。」「」」

「フオツ！！《何じゃと！》」

それから縛り付けているゴーレムを殴ったり蹴ったり手裏剣で攻撃したりどこから出したかわからないトンカチで攻撃したり、落書きしたりしていた。

私が攻撃したら問題になるので見て楽しんだ。

翌日、学園長は怪我と言った怪我はないのに痛みに悶えていた。回りからはついに狂ったかと思われていたそうだ。

9 時間目「図書館島」（後書き）

ワルツ「主、機嫌がいいみたいだニヤ」

アリサ「ええ、あのジジイを間接的にもボコれたので。」

明日菜「アリサ、口調が悪くなってるわよ。」

アリサ「あのジジイにはこれで十分です。」

ワルツ・明日菜「まあ、確かに。」

10 時間目「チャチャゼロ」(前書き)

どこでチャチャゼロを出そうか悩んでたんです。かなり強引になりましたが。

10時間目「チャチャゼロ」

side アリサ

テストの結果、学年一位だったです。そして春休みに入ったのですが。

「しばらくぶりですね、私に向かって来る刺客は。」

用事があつて学校に行つて、終わったのが夕方だった。それから今日は料理当番なので買い物をして帰つて夕食を食べたらエヴァさんのところに行く予定だったのに。

「お前がアリサ・スプリングフィールドだな？上の命令に従いお前を抹殺する。」

そこには、ロープを被つた男がいる。その男は術式を浮かべあげて魔物を召喚する。その数約二百。

（どうしよう、こんな団体さんの相手初めてですね。魔法無効化能力で送り還しましょうか？・・・いえこの程度必要ありませんか。こちらの手の内を見せたくありませんから。）

メガロメセブリア元老員からの刺客というのはわかってますし。

「悪いな嬢ちゃん、あんたに怨みは無いけど仕事やから。」

・・・魔物なのに関西弁？まあどうでもいいか。

「仕方ありませんよ。では殺り合いましょう。『アデアット』」

私は系での実戦を試してみようと思いアーティファクトを出し、魔力と殺気を放つ。

「威勢ええのう嬢ちゃ・・ほえ？」

ズドーン！！

魔物たちが突っ掛かって来そうになった時先頭にいた下級の魔物が大胆にこけた。

「何しとんのや！！」

「いや、何か引っ掛かってな。」

アーティファクトを出してすぐに張っておいた系におもいつきし引っ掛かった。罨成功！！この隙に術者も含めて攻撃をする。

「【魔法の射手・連弾・雷の209矢】」

「しもた！！」

一発で送り還せる程の魔力を込めた矢が魔物たちに向かう。一体に一発当たるようにコントロールし術者は死なない程度のお見舞いしました。術者は回避しましたが私が折り返させたのには気づかず命中しました。追尾？そんなの必要ありません。魔力を感じて居場所は分かりますから。

「アリサ！！」

「大丈夫かい！！」

「刹那さん！！真名さん！！」

私が術者を縛り上げた後で真名さんと刹那さんが駆け付けてきたので私も駆けて二人に飛びついた。

side 刹那

アリサの帰りが遅いと思って真名と迎えに行こうと思ったら、急にアリサの魔力を感じたので急いで魔力の感じる場所へ向かった。するとそこには男を縛り上げたアリサがいた。目立った傷は無い。私たちは声をかける。

「アリサ!!」

「大丈夫かい!!」

「刹那さん!! 真名さん!!」

私たちが駆けて行くとアリサも走って抱き着いてきた。

「怪我は無い?」

「うん。」

「アリサちゃん!!」

「なんだもう終わったのか。」「マスター・・・」

こちらも魔力を感じたのか、エヴァさんと明日菜さん茶々丸さんと茶々丸さんに抱かれている人形。

「明日菜さん!! 茶々丸さん!! エヴァさん!!」

「なにどうしたの?」

「無事だったみたいだな。」

「マスターがこの中で一番心配していたのに……もちろん私たちも心配しました。」

「茶々丸余計なことを言うな。巻くぞ?」

「あっ／＼マスターちよつと待つアア#。
十
／／／／／／」

「ケケケ、オマエガアリサカ？」

「ハア、ハア」

「そうですが、その前に茶々丸さん大丈夫ですか？」

明日菜さんは本気で心配している。エヴァさんに巻かれた茶々丸さんは色っぽい声を上げている。それとあの人形何？

Side
明日菜

エヴァちゃんが茶々丸さんのぜんまいを巻いた後、

「「「「「ところでその人形なんですか？」」」」」

皆が揃って質問した。

「こいつはだな、私の最初の従者のチャチャゼロだ。」

「ヨロシクナ。」

事情を聞くと封印のせいで魔力供給が出来なくなり、忘れられてたらしい。

「ヒドイトオモワネエカ？」

今も動くことが出来ないらしい。私はふと思いだし影からネツクレスを取り出してチャチャゼロさんにかけた。

「ナンドコレハ？」

「自然界の魔力を集める魔法具です。思いつきで作り始めて最近成功品ができたの。」

「なんでまたこんなものを？（欲しがりそうな奴がいっぱいいるな。）」

エヴァが欲しそうな顔をしていた。そりゃそーですよこれがあれば魔法溶媒なんて使わなくてすむんですから。

「これに術式組み込んで転移専用と浮遊術専用を作ろうと思ったんだけど宝石の容量がたりなくてどうしようかと悩んだの。」

「ああ、あの時作ってた奴かい？」

真名さんが尋ねてきた。

「真名さん何か知ってるの？」

「ああ、前にアリサに頼まれたんだ。魔法具を作るにばれにくいばしよは無いかつて。それで銃を置いてるところに連れて行って道具やら試作品やらを置かせてあげた。すごいよあの精密さは。」

「今度見に行つていい？」

「べつに構いませんが、それよりチャチャゼロさん動ける？」

私はチャチャゼロさんが動けるか確認をしたかったので聞いてみた。

「オ！？カラダガウゴク！！」

チャチャゼロさんは手足を動かしている。

「まだそんなに溜まっていなと思うから、飛び回ったりは後でやってね。」

「オウ、アリササンキューナ。ソレトコレナンド？」

そういつてチャチャゼロが転がっている（術）者を指す。

「おそらくアリサ先生を襲った刺客だと思われます。」

いつの間にかもとに戻っていた茶々丸さんが私の変わりに説明した。

「「「何？」「」「」」

その後学園長室に死にかけた男が強制転移で送られたとかなんとかその後アリサに向かって来る刺客がいなくなっただけらしい。

10 時間目「チャチャゼロ」（後書き）

チャチャゼロ「フウ、ヤットデバンガキタゼ。」

ワルツ「まあ忘れられてたからニヤ。」

チャチャゼロ「ナンダオマエ？キツテイイカ？」

アリサ「ダメですよ。これでも一応神木・蟠桃の意思ですから。」

チャチャゼロ「アア？アノデッケエキカ！！」

ワルツ「今はワルツって主に付けてもらってるニヤ」

チャチャゼロ「ソレニシテモ、コレスゲエナ。」

アリサ「魔力供給いらないでしょ？」

チャチャゼロ「アア、ホントサンキューナ！！」

ワルツ「あれ、おいら空気？」

11時間目「とある日常？」（前書き）

・・・うまくかけません。

11時間目「とある日常？」

side アリサ

今日は仕事だったのだけど、午前中に終わったので新田先生が『アリサ先生は最初からちゃんと仕事をこなしていたので先に上がっていいですよ』と言われた。ここで断るのもあれなので言葉に甘えて今日は一人で街をぶらつくのかと思い、更衣室でスーツからワンピースに着替えて（影に入れておいた）玄関を出ようとしたところ黒いスーツを来てサングラスをかけた男を見た。

「ん？何だろ？」

気になって回りの気配をたどると馴染みのある気配が柱の影から感じた。

「着物姿も素敵ですね木乃香さん。」

「えッ！あ、アリサちゃん！？」

そこには、おめかしをして着物を来ている木乃香さんがいた。

「ちょうどよかった。助けて貰えんか？今追われとるんよ。」

「追われてるってあの黒い男の人たちですか？」

「そうなんよ。おじいちゃんがおい合いをさせるって言ってきてな、私はそれが嫌やから逃げて来たんよ。」

「なるほど大体理解できました。（あのジジイお折檻が必要ですね。）」

「やっと見つけましたよお嬢様。」

side アリサ

アリサちゃんが状況把握をしていると男数人に見つかってしまった。

「さあ、行きましょう。」

「嫌やあ!!」

男の一人がうちの腕を掴んで無理矢理連れて行こうとする。うちは必死で抵抗するがズルズル引っ張られる。

ドコッ!

突然そんな音が聞こえたと思ったらうちを引っ張っていた男が横に吹っ飛んだ。

「嫌がつている女性を無理矢理連れて行こうとする。・・・最低な男ですね。それをさせる糞ジジイ許しません。」
「へっ?」

アリサちゃんから黒いオーラが出ているのがわかる。けどどつちはそれが頼もしく感じる。

(そういえば・・・)

麻帆良に来た当時最初に聞いた彼女の性格を思い出した。

『女性に対して失礼な人が嫌い』

それが、最初に聞いた彼女の性格。

side アリサ

木乃香さんを無理矢理連れて行こうとしたので跳び回り蹴り（二回転）を脇腹にお見舞いしました。この時初めて思いました。『魔法を使わない格闘技をやっていてよかった。』と。

「なんだお前は！！」

男の一人が聞いて来た。

「嫌がる生徒を連れて行こうとした男を蹴り飛ばした担任の先生です。」

「なっ！？」

どうやらさっきの動きが見えなかったようです。この人たちに怨みはないので引いて貰いますか。私は一人に近づき相手の手に札束を握らせる。

「どうでしょう？ここはこれで引いてくれませんか？」

「は、はい！！」

男たちは大急ぎで帰って行った。そして子ども先生、特に女の子の方は怒らせてはいけないという噂が広がるのはまた別のお話。

side 木乃香

アリサちゃんはほとんど一撃で男を帰して行った。さっきの攻撃な
んとか見えた。

「アリサちゃん格闘技してたんやね。」

「見えたんですか？」

アリサちゃんはうちが見えたことにびっくりしていた。

「うち明日菜の全力疾走追えるんよ。最初はきつかったけど馴れて
もうたわ。」

「動体視力良いんですね。」

そして、どういう競技かと聞いたら答えてくれたわ。
バリッやつけ？打つ（殴る蹴る）投げるキメる（関節）の競技が合
わさった日本で言う柔道、空手、合気道が合わさった感じのものら
しい。

「今日はありがとな。」

「いえ、当然のことをしたまでですよ。後で学園長にはお灸を据え
ておきます。」

「その時はうちも連れてつてくれん？うちもおじいちゃんにはつき
し言いつきたい。」

もう自分の倍以上の歳の人とお見合いなんて嫌やからね。

「そうですね明日にでも行きますか。今日中に言うことをまとめておけば良いですから。」

「そやね、ほなこれからどないしよか？それと仕事終わったんやろ？いつもどおりの喋り方でええよ。」

「私は街をぶらつこうと思ってるんだけど？木乃香さんも一緒に行く？」

やっぱりこっちの方が落ち着くわ。アリサちゃん最初は固かったけど、一緒にお菓子作りしとったら打ち解けてこの喋り方にしてもろた。仕事なら仕方ないけど歳もそんな離れてへんし妹ができた気分や。

「行く！！」

うちもアリサちゃんと街を回ることにした。

「じゃあとりあえず着物から着替えなきゃね。」

「そやね。一旦寮に戻らなあかんな。」

「急ごう？」

「うん。」

side . . .

アリサと木乃香はその後ショッピングを楽しんだ。いつものごとくアリサは木乃香の着せ替え人形になったり。アクセサリーショップに行つてアリサが唸っていたり。次に行こうとしている途中賑やかな一角があった。

side アリサ

「あれ、亜子とアキラやない？」

「あつ、ホントだ。」

何か気になって来たら睨み合っている男が二人にそれを見てオロオロしているアキラと亜子がいた。

「行ってみよか？」

「んー？それでも一応教師だから生徒どうしの喧嘩は止めなきゃな。はあ。」

楽しくショッピングのつもりできてこんなことが起きるとは。

「とりあえず二人のところにいこか？」

「はい。」

side アキラ

今日は部活が休みだったから午前中から亜子とショッピングに来ていた。道を歩いていたら亜子と目の前で睨み合っている男の片方にぶつかってしまった亜子がおもいきり謝っていた。その様子をもう一人の男がナンパと勘違いし言い争いになって今の状況に至る。もちろん止めたが、両者とも言っことを聞かない。

「ちょっと、待ってくだ「うるせえ！！」「キャツ！！」」

「アキラ!!」

勘違いしたほうの男を止めようとするが弾かれて尻餅をついてしまった。亜子が駆け寄って来る。

「アキラさん、大丈夫ですか？」

肩にポンツと小さな手が置かれる感触がした。振り向くとそこにはアリサ先生がいた。

side アリサ

（勘違いの上に女性に手を挙げるなんて、許せませんね。）

私はの苛立ちは頂点に達した。ジジイのせいで溜まったものもここに来て苛立ちにプラスささって抑えている魔力が解放しそうになるぐらい。

「アリサ先生？」

喧騒に入るところでアキラさんに止められる。

「大丈夫です。」

「でも!!」「アキラ今アリサちゃんを止めん方がよかよ。」

アキラさんが私を止めようとするのを木乃香さんが止める。私は気にせず勘違いしたほうの男の前に歩い行く。

「何だい嬢ちゃん危ないから下がって——」成敗!!」グハッ!」

私は一気に距離を詰め男の鳩尾をおもいつきし殴る。男は軽く3m吹っ飛ぶ。その際骨の折れるような音がした。後々何か面倒事が起きると嫌なので手が離れる瞬間に気で治療する。この間わずかコンマ5秒。

「女性に手を挙げた報いです。」
「・・・」

回りの観客がシンとする。それを気にせずに木乃香さんのところに向かう。

「行きましょう。皆さん。」
「「うん。うん。」」

そついうと私たちはショッピングに戻るためにその場から離れた。

「キャー——!!」
「何!? あの子!!」
「すごく綺麗!!そして強い!!」
「あれじゃない?噂の・・・」
「ホント!!」
「私あの子の勇姿に惚れたわ!!」

そんな声が後ろから聞こえて来た。この後アリサのファンクラブができたらしい。アリサがそのことを知るのはまだ先のことである。

side アキラ

木乃香にアリサ先生を止めるのを止められた。最近ストレスが溜まっていいらしい。原因は学園長やネギ先生のことプラスしてあの男の対応らしい。木乃香はたまにアリサ先生の愚痴を聞いているらしい。私はアリサ先生はいつも悩み事なんて無いような顔をしていたので気がつかなかった。でも、ストレス解消とは言えあの中に入っていくのは危険だと思う。

「大丈夫だよ。アリサちゃん格闘技やってるようやし。」
「「えッ！」」

私も亜子も驚いた。あんなに華奢（本人には失礼だが）な体で格闘技をやってるとは思えなかった。

ズザザザッ！！

「「へっ？」」
「ほらな。」

男が地面を滑って来た。しかも気絶している。

「女性に手を挙げた報いです。」
「・・・」

アリサ先生が何かつぶやいた。それは私たち女性にとってとても頼もしい言葉だった。回りの人々、特に女性は感激していた。私もその一人に入っていた。

「行きましょう。皆さん。」

「う・うん。」

声をかけられて現実に戻った。アリサ先生の顔はさつきより清々しかった。アリサ先生について行くと歓声が聞こえて来た。アリサ先生が気にしてないので私たちも気にせずあるいていった。

side 木乃香

こちらは今ある喫茶店にいる。理由はアリサちゃんがここで新発売のスイーツを食べたい（当初の目的）と言って頼んで待っている。どうやら結構時間がかかるらしいわ。

「アリサ先生ってなんで格闘技始めたの？」

「んっ？」

紅茶をストレートで味わっているアリサちゃんにアキラが尋ねていた。

「それうちも知りたい！！」

亜子とハモリながら聞いた。

「そうですね・・・自分の身を守るため・・・ですかね。」

アリサちゃんはティーカップを振って紅茶を波立てそれを見つめながらいった。この時アリサちゃんの目を見てうちは少し後悔した。

目が寂しそうやったから。アキラもその目に気づいたみたいや。

「もしかしてアリサ先生可愛いから小さいながらもナンパされるからそれに対抗したの？」

「まあ、そんな感じですね。」

side アキラ

私は後悔していた。アリサ先生の寂しそうな目を見て『なんで私はこんな質問したのだろう。』と思っていた。それに気づかず亜子はアリサ先生に質問している。

「わかるわかる。私も男やったらアリサ先生に襲いかかっていたかも。」

「ハハハ、冗談はやめて下さいよ。・・・その目怖い。」

「んっ？冗談やないよ。」

アリサ先生は笑っている。私には無理に笑っているようにしか見えなかった。

「お待たせいたしました。DXフルーツパフェです。因みにこちらは30分以内完食いたしましたら景品が尽きます。」

店員がアリサの頼んだスイーツを持って来た。それは明らかに一人用ではない容器に、バナナ、キウイフルーツ、パイナップル、チェリー、イチゴ等の様々なフルーツで飾られたパフェだった。

さすがにこれは・・・と思いアリサ先生を見るとさっきまでのが嘘

のように目がキラキラしていた。さっきのギャップでとても可愛い
と思った。

「先生いける？」

「いけるかどうかじゃありません。いくんです。」

『おお、あれが出てから一週間いままで誰もクリアできなかったあ
れの挑戦者じゃ。』

『マジか！！ってあの子さっき広場で男を吹っ飛ばした子じゃない
か！！』

『キヤー！！アリスちゃん今の台詞カツコイイー！！』

後ろから何やら聞こえてきた、アリス先生はすでに有名人のようだ。
私は少しモヤモヤしていた。

（ハッ／＼私ったら何女の子に――）

――嫉妬しているのだろう。

side 亜子

今、アリス先生がDXフルーツパフェを食べはじめて20分や。

（ほんま、どこにこんなに入るのかな？）

軽く10人前くらいのパフェだったものがすでに2、3口まで減っ
ている。

「すごいな。」

最初こそ大丈夫かと心配したけどいらなかった。

カランツ。

スプーンが置かれる音がした。

「ごちそうさまでした。」

食べ終わったようだ。アリサ先生はナプキンで口の回りを拭いている。すると、

『キヤーー！！完食したわ！』

『景品ってなんだ！？』

『さすがアリサちゃん！！』

大勢がアリサ先生を賞賛している。

（いつの間に増えたんやろ？）

アリサ先生は回りを気にもとめず、ちっちゃい袋に入った景品を受け取っている。

「景品って何やった？」

木乃香がアリサ先生に聞いている。それは私も気になる。

「ちょっと待って・・・」

アリサ先生は包装を解いて中身を見る。

side アキラ

「うわー。キレイ。」

中から出て来たのはガラスでできた三日月が飾りをついたネックレスだった。アリサ先生は光を透かして見ている。その動作が可愛いと思ってしまう。

「ガラス細工かあ。」

「光を通すとしても綺麗。」

「ほんまや。」

木乃香と一緒にネックレスを眺める姿が姉妹のように見えてうらやましい。

「・キラ、アキラ!!」

「っ!!何!？」

「どしたの?ボーツとして?」

亜子が心配そうに見ている。

「な、なんでもないよ!？」

私は慌てて反応した。

「ふーん?ならいいけど。そろそろ帰ろっだって。」

「あつ、うん。」

なんか亜子の顔がにやけていたような気がした。うんっ！！見なかったことにしよう。

side - - -

その後、寮に帰ってアキラがアリサのことだからかわれたの言うまでもない。

いっほ寮に帰ったアリサは刹那に昼間のことを伝えた。すると刹那は凄い形相で部屋を出ていった。翌日、木乃香とアリサが学園長室にいった時、学園長が気絶していてところどころに白い羽根がささっていたらしい。

アリサはストレス解消アイテムが使えなくなっていたことに不満げだったが弟子も最近ストレスを抱えてるのは感じていたので見過ごすことにした。

11時間目「とある日常？」（後書き）

チャチャゼロ「オウオウ。俺ノ出番ガネエジヤネエカ。」

ワルツ「仕方ないニヤ。作者は非日常のじゃない日常を書きたかつたみたいだから。」

チャチャゼロ「ソレニシテモヨウ。刹那ノヤツ学園長切りニイクンナラ俺モ誘ッテクレレバナア。」

茶々丸「姉さん、桜咲さんにも譲れないものもありますよ。」

チャチャゼロ「オウ。茶々丸ジヤネエカ。ドウシタ今アリサト”二人キリ”デノ料理研究ジヤナカタノカ？」

茶々丸「な、何のことですかノノ今はただ生地を寝かせているだけですよ!？」

ワルツ「二人きりつてところは否定しないんだニヤ。」

茶々丸「えッ!？えッ?・・・ボン!!」

ワルツ「わー!？茶々丸が壊れたニヤー!!」

チャチャゼロ「気ニスンナ。オーバーヒートシタダケダ。」

ワルツ「気にしなきゃ駄目だニヤー!!」

チャチャゼロ「ハア。平和スギテツマンネエ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0315v/>

魔法先生ネギま！～世界を思う少女（仮）～

2011年9月20日18時42分発行